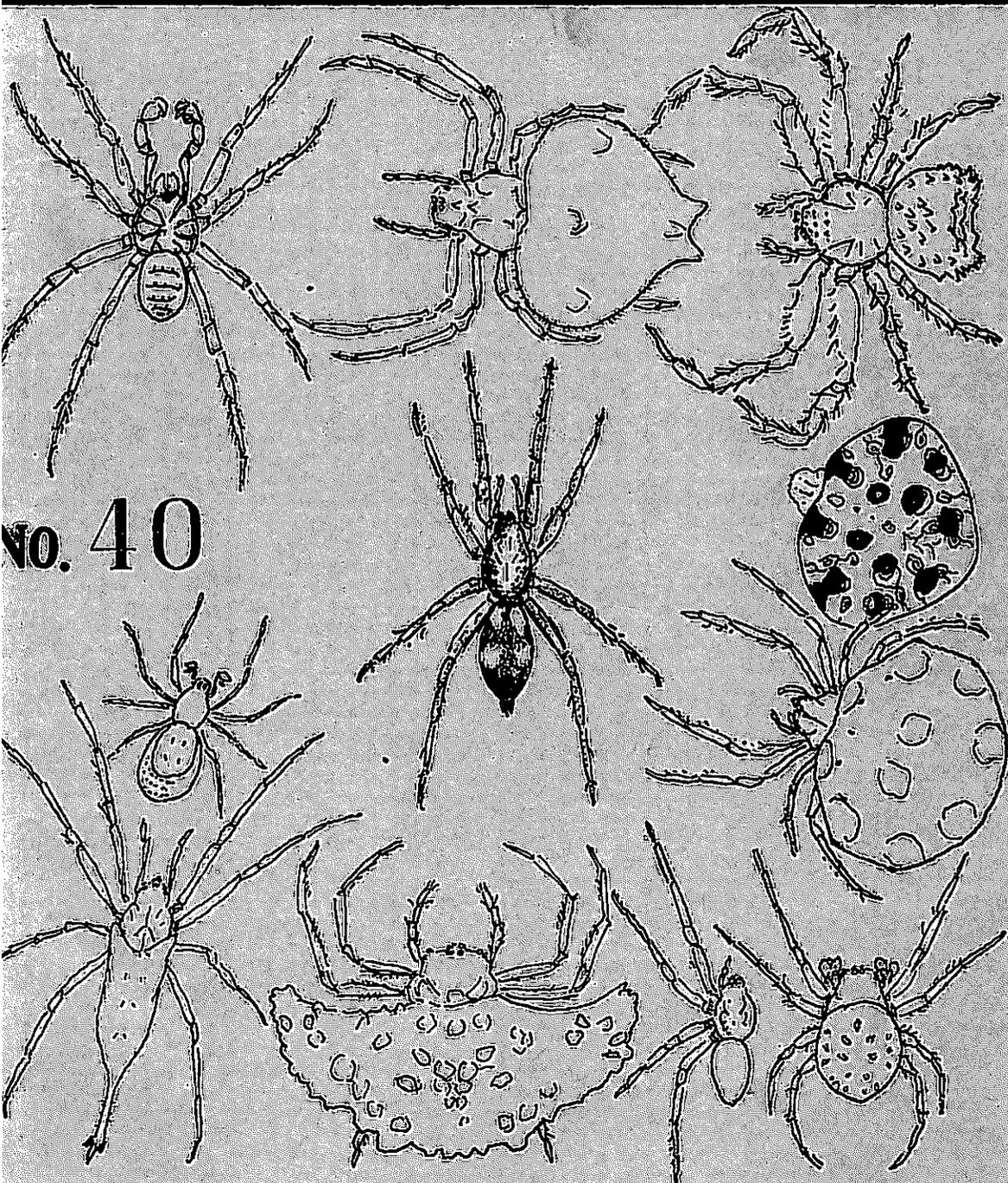


東京蜘蛛談話會會誌

KISHIDAIA



No. 40

東京蜘蛛談話會 東京都目野市豊田1.896 萱嶋泉方(TEL.0425-81-7128)

目 次

特別寄稿 「研究」ということ-----吉 倉 真 (1)

東京蜘蛛学会観察会報告 1975年度

春 丹沢山塊ヒジリ蜂のクモ-----栗 原 輝代子 (3)

夏 富士山のクモ Check list-----小 野 展 嗣 (6)

秋 滝山城趾のクモ-----新 海 栄 一 (11)

信 例 クモ学界 1975年

10 犬 ニ ュ ー ス----- (15)

小観察めこれね(5)-----高 野 伸 三 (18)

キジロオヒキグモ *Arachnura logio Yaginuma* の自宅観察メモ-----松 浦 祐 司 (20)

観 察 日 誌-----佐久間 良 三 (22)

クサグモの生活史-----鈴 木 勝 浩 (26)

あっちこっちのくも-----熊 田 憲 一・山 川 守 (29)

ヘトリグモの分類 (II) -日本産ヘトリグモ7種について-----松 本 誠 治 (33)

DRAGLINE

蜘蛛の脱皮について-----佐久間 良 三 (40)

アリを好むクモ-----松 本 誠 治 (41)

カクレ帯をつけたヤマオヒグモの幼生-----" (41)

「水蜘蛛」-----佐久間 良 三 (28)



「研究」ということ

—— 吉 倉 真 ——

KISHIDAIA の編集の方から、なにか書いてくれとご注文がありましたので、「研究」ということについて、三述べさせていただきます。誰でも雑誌に発表するからには「よい論文」を心にかけているわけですが、よい論文を書くにはもちろんよい研究をしなければなりません。近頃は出版洪水とか申しまして、沢山の書物、雑誌が出ていますが、学界でも同様で、クモ類に限ってみても、年々出版される論文の数は相当なものです。その中にはなにか調べたというだけの調査報告から、重要な原理、原則を発見したという研究論文にいたるまで、いろいろあります。範囲をひろげて、動物学、生物学ということになれば、想像もつかないくらい沢山の論文が年々世界各国において出版されています。ところがこのおびただしい論文も、年数がたつにつれ次第に淘汰され（いや発表されたとき、すでに無視され、捨てられてしまうものさえある）後々まで重要な研究として残るものは一体どれだけあるか、ということになると大いに考えさせられます。たとえ学位論文であっても、さっぱり引用もされず消えていくものが珍しくありません。同じ労力、時間、費用をかけるなら、誰もいの中の長い論文を書きたいとねがわないものはないでしょう。このことについて述べるのが本文の目的です。

私はクモ類の形態、発生、系統進化の方に関心を持っていますので、話は自然その方になってしまいでしょうが、まず第1に何を研究材料に選ぶかということ。私はクモの発生研究にキムラグモを選びました。このクモは欧米にはおられませんし、誰もまだその当時発生を研究した人がありませんでした。そればかりでなくこのクモはもっとも原始的なクモで、このクモの発生を研究すれば、クモの系統進化が明らかになるという、系統学上重要な地位を占めているものです。さいわい私の住んでいる熊本市には、このクモが普通にいたので好都合だったわけです。もし材料が普通のクモ、たとえばオニグモとかコモリグモのようなものであれば、同じことをやっても、いわゆる研究にはならなかったでしょう。発生を研究していると、どんな研究が必要であるかが分ってきます。私は現在、ウズグモ類の発生研究が不足していると思っています。

とにかく日本特産で、系統学上重要な動物の研究はやってみる価値があります。駒井博士のコトラグの研究などはそのよい例だと思えます。

第2に、先人のやった研究を徹底的にやり直してみるというやり方があります。こういうことで立派な業績をあげられた方々が少なくありません。実験にオリジナリティはないけれど、結果は予想できていますし、やればやっただけのことはあります。ただやりぬく努力が必要です。また比較研究によって分野をひろげていくことも大切なことで、それによってクモの系統関係を考へてみることも必要なことと思えます。パーブ博士の「クモ類の中樞神経の解剖」1965の論文はその好例で、複雑な神経系をよくもこうまで調べあげたものと、ただただ感心するばかりです。ドイツの学者でこうい

ういき方をして、ほり大な論文を書いている人を沢山知っています。

第3に誰もまだ手をつけていない分野を開拓していくというやり方、フランスのミロ博士などはこの例にはいるかと思えます。クモの内部形態、細胞組織などをよく調べた人ですが、コヨリムシ、クツコムシのような特殊なグループのクモ類まで調べておられます。一昨年(1974)パリでお目にかかった時はたいへんご元気で、シーラカンスについての研究をなさった時の大きな写真帳を持ち出され、いろいろお話をしておりました。シーラカンスの研究とはミロ博士らしいではありませんか。その写真の一部は *Traite de zoologie* 第13巻第3分冊(魚類)(1958)に出ています。

クモは昆虫ほど何によらず研究されていませんので、未開拓の分野が多く、発生の方でも、たとえば後胚発生における器官形成の問題などほとんど調べられておりません。実験的研究もやる人が少なく、今なおホルム博士の実験発生学的研究(1952)が光っています。

第4に新しい技術を利用すること、今ではもう電顕を使っての研究は一般的になっていますが、最初のころは手あたり次第に動物の組織を電顕で調べ、沢山の報文を書いた人があります。クモではまだまだ電顕でやる仕事がある筈です。走査型電顕を使っての研究など、近頃ふえてきていることは皆さまご存知のことと思えます。クモを材料としての電気生理学的研究も近頃目につきます。

こんなことを書いていると切りがありませんので、このへんでやめますが、いずれにしても研究ということとは「新しいこと」を発見することですから、何が新しいか古いかが分っていなければどうにもなりません。それにはやはりふだんの勉強が必要です。そしてクモと昆虫とはわりに縁の近い仲間ですし、昆虫学はずいぶん進歩していますから、昆虫でこうなら、クモではどうか、ということになり、研究のテーマは山ほどあると思えます。

若い研究心の旺盛な方々に大いに期待しているところです。

-----*-----*-----*

先号に続いて今回も第一線で御活躍中のクモの先生に特にお願いして我々の指針となるようなお話を伺うことができました。吉倉先生は *アクタアラクノロギカ* の創刊号(昭和11年)に出ている東亜蜘蛛学会の発企人名簿にお名前が見られるように古くから日本のクモ学界をリードしてこられたお一人です。戦前は樺太でクモの研究をされ、「アカオニクモの生活史」(1939)や「樺太産蜘蛛類黄金蜘蛛科生態と分類」(1941)などの論文を発表されています。戦後は熊本大学でキムラグモをはじめ多くの蛛形類の発生の研究にとりくまれ、論文は世界的に評価されていて、Levi 訳著「*INVERTEBRATE ZOOLOGY Vol. 2*」(かなりの頁蛛形類各目の総説)にも引用されています。また、蛛形類の進化・系統に関してたいへん広い視野を持っておられ、*ATYPUS* 33号から53号の間に9回にわたって連載された「クモ類の系統」は、クモ研究者たるもの一度は読んでおきたい重要文献と思えます。

快く執筆をお引受け下さった吉倉先生に心からお礼申し上げます。

(編集者)

丹沢山塊ヒジリ峰のクモ

栗原輝代子

1975年5月18日、東京蜘蛛談話会の第8回観察会が神奈川県伊勢原市三ノ宮にあるヒジリ峰において行なわれましたので、その際のクモの目録を報告致します。

ヒジリ峰は、標高375mで、大山のほぼ南西にあたり、丹沢山塊を背にした名のごとく峰である。環境は、クヌギ、コナラの雑木林であるが、途中所々にミカン園があり、峰の頂上付近に至っては、共有林のクロマツ林になっている。

丹沢山塊のクモについては先に、山川・熊田(1973)による報告がなされているが、今回の観察会において、数種さらに付け加えるものが観察され、今後の丹沢山塊のクモの良き資料となれば幸いである。

当日の参加者：新井明久、新井 進、小野展嗣、上遠恭子、熊田憲一、栗原輝代子、
(敬称略) 佐久間良三、佐藤幸子、佐藤秀樹、新海栄一、鈴木恵一、高橋 登、
仲秋恵子、古浜 隆、松本誠治

目 録 (※印は丹沢山塊新記録)

ANTRODIAETIDAE	カネコトタテグモ科
1. <i>Antrodiaetus roretzi</i> (L. Koch)	カネコトタテグモ
ATYPIDAE	ジグモ科
2. <i>Atypus karschi</i> Doenitz	ジグモ
ULOBORIDAE	ウズグモ科
3. <i>Uloborus varians</i> Boes. et Str.	ウズグモ
SEGESTRIIDAE	エンマグモ科
4. <i>Ariadna lateralis</i> (Karsch)	ミヤグモ
PHOLCIDAE	ユウレイグモ科
5. <i>Pholcus crypticolens</i> Boes. et Str.	ユウレイグモ
THERIDIIDAE	ヒメグモ科
6. <i>Anelosimus crassipes</i> (Boes. et Str.)	アシプトヒメグモ
7. <i>Ariamnes cylindrogaster</i> Simon	オナガグモ
8. <i>Conopistha fur</i> (Boes. et Str.)	フタオイソウロウグモ
9. <i>Rhomphaea sagana</i> (Doen. et Str.)	ヤリグモ

- | | | |
|-----|---|-------------|
| 10. | <i>Stemmops nipponicus</i> Yaginuma | スネグロオチバヒメグモ |
| 11. | <i>Theridion angulithorax</i> Boes. et Str. | ツリガネヒメグモ |
| 12. | <i>T. chikunii</i> Yaginuma | バラギヒメグモ |
| 13. | <i>T. sterninotatum</i> Boes. et Str. | ムナホシヒメグモ |
| 14. | <i>T. tepidariorum</i> (C. Koch) | オオヒメグモ |

LINYPHIIDAE

サラグモ科

- | | | |
|------|---|----------|
| 15.※ | <i>Arcuphantes tamaensis</i> (Oi) | タマヤミサラグモ |
| 16. | <i>Linyphia oidedicata</i> (Heldsingen) | ヘリジロサラグモ |
| 17. | <i>Neolinyphia japonica</i> Oi | ツリサラグモ |
| 18. | <i>N. nigripectoris</i> Oi | ムネグロサラグモ |
| 19. | <i>Prolinyphia yunohamensis</i> (Boes. et Str.) | ユノハマサラグモ |

MICRYPHANTIDAE

コサラグモ科

- | | | |
|------|---|-----------|
| 20.※ | <i>Nematognus sanguinolentus</i> (Walckenaer) | チビアカサラグモ |
| 21. | <i>Oedothorax insecticeps</i> Boes. et Str. | セスジアカムネグモ |

MIMETIDAE

センショウグモ科

- | | | |
|-----|-----------------------------------|---------|
| 22. | <i>Ero japonica</i> Boes. et Str. | センショウグモ |
|-----|-----------------------------------|---------|

SYMPHYTOGNATHIDAE

ヨリメグモ科

- | | | |
|------|---------------------------|----------|
| 23.※ | <i>Mysmena jobi</i> Kraus | ナンブコツブグモ |
|------|---------------------------|----------|

ARGIOPIDAE

コガネグモ科

- | | | |
|-----|---|-----------|
| 24. | <i>Acusilas coccineus</i> Simon | ハツリグモ |
| 25. | <i>Araneus ventricosus</i> (L. Koch) | オニグモ |
| 26. | <i>A. pentagrammicus</i> (Karsch) | アオオニグモ |
| 27. | <i>A. cucurbitinus</i> Clerck | ハナオニグモ |
| 28. | <i>Neoscona scylla</i> (Karsch) | ヤマシロオニグモ |
| 29. | <i>Zilla sachalinensis</i> (Saito) | カラフトオニグモ |
| 30. | <i>Argiope amoena</i> L. Koch | コガネグモ |
| 31. | <i>A. minusa</i> Karsch | コガタコガネグモ |
| 32. | <i>Chorizopes nipponicus</i> Yaginuma | ヤマトカナエグモ |
| 33. | <i>Cyclosa argenteoalba</i> Boes. et Str. | ギンメッキゴミグモ |
| 34. | <i>C. sedeculata</i> Karsch | ヨツデゴミグモ |

TETRAGNATHIDAE

アシナガグモ科

- | | | |
|-----|---|-----------|
| 35. | <i>Leucauge subblanda</i> Boes. et Str. | コシロカネグモ |
| 36. | <i>Tetragnatha caudicula</i> Karsch | トガリアシナガグモ |
| 37. | <i>T. praedonia</i> L. Koch | アシナガグモ |
| 38. | <i>T. squamata</i> Karsch | ウロコアシナガグモ |

UROCTEIDAE

- 39.
- Uroctea compactilis*
- L. Koch

ヒラタグモ科

ヒラタグモ

AGELENIDAE

- 40.
- Agelena limbata*
- Thorell

タナグモ科

クサグモ

- 41.
- A. opulenta*
- L. Koch

コクサグモ

PISAURIDAE

- 42.
- Dolomedes sulfureus*
- L. Koch

キシダグモ科

イオウイロハシリグモ

- 43.
- Pisaura lama*
- Boes. et Str.

アズマキシダグモ

LYCOSIDAE

- 44.
- Lycosa depectinata*
- (Boes. et Str.)

コモリグモ科

カガリビコモリグモ

- 45.
- Pardosa laura*
- Karsch

ハリゲコモリグモ

- 46.
- P. T-insignita*
- (Boes. et Str.)

ウヅキコモリグモ

THOMISIDAE

- 47.
- Heriaca mellottei*
- Simon

カニグモ科

アシナガカニグモ

- 48.
- Misumenops japonicus*
- (Boes. et Str.)

コハナグモ

- 49.
- M. tricuspis*
- (Fabricius)

ハナグモ

- 50.
- Oxytate striatipes*
- L. Koch

ワカバグモ

- 51.
- Philodromus subaureolus*
- Boes. et Str.

アサヒエビグモ

- 52.
- Pistius truncatus*
- (Pallas)

ガザミグモ

- 53.
- Thomisus labefactus*
- Karsch

アズチグモ

- 54.
- Tibellus tenellus*
- (L. Koch)

ジャコグモ

- 55.
- Thanatus formicinus*
- (Clerck)

ヤドカリグモ

- 56.
- Tmarus piger*
- (Walckenaer)

トラフカニグモ

- 57.
- Xysticus croceus*
- Fox

ヤミイロカニグモ

SALTICIDAE

- 58.
- Aelurillus festivus*
- L. Koch

ハエトリグモ科

ヤマジハエトリ

- 59.
- Carrhotus xanthogramma*
- (Latreille)

ネコハエトリ

- 60.
- Hasarius doenitzi*
- Karsch

デーニッツハエトリ

- 61.
- Jotus difficilis*
- Boes. et Str.

マガネアサヒハエトリ

- 62.
- Icius linea*
- (Karsch)

メガネアサヒハエトリ

- 63.
- Plexippus annulipedis*
- Saito

マダラスジハエトリ

- 64.
- Dendryphantas atrata*
- (Karsch)

カラスハエトリ

- 65.
- Sitticus patellidens*
- Boes. et Str. シラホシコグチャハエトリ(恵泉短大内)

CLUBIONIDAE

- 66.
- Chiracanthium cutittha*
- Boes. et Str.

フクログモ科

アシナガコマチグモ

KISHIDAIA 40 1976, May

67. *Phrurolithus nipponicus* Kishida ウラシマグモ
CTENIDAE シボグモ科
68. *Anahita fauna* Karsch シボグモ
GNAPHOSIDAE ワシグモ科
69. *Zelotes pallidipatellis* (Boes. et Str.) マエトビケムリグモ

ま と め

今回の観察会では21科69種のクモが確認された。新たに記録された種は、タマヤミサラグモ、チビアカサラグモ、ナンブコツブグモ、カガリビコモリグモ、シラホシコゲチャハエトリの5種であった。

丹沢山塊のクモは1973年に山川・熊田が223種を報告しており、今回の記録を合わせると、229種が確認されたことになる。今後の調査により、さらに多くの種が記録されると思われ、年間を通した総合的な調査に期待したい。

東京蜘蛛談話会観察会報告1975年度一夏一

富士山の蜘蛛 Check list

小 野 展 嗣

〔参加者〕 古浜隆・遊沼克巳・松本誠治・松浦祐司・小野展嗣・小澤賢樹・佐久間良三・佐藤秀樹(ザトウ虫)・嶋田順一・新海栄一・鈴木恵一(ササラダニ)・高橋登・高野伸二

(敬称略ABC順、()付の二方は会員外)

本年度のメイン観察会、富士山合宿は8月16日～19日上記の蒼蒼たらない錚錚たる精鋭が参加して、折りから台風接近による風雨について強行された。悪天候のため思よりな採集観察活動ができなかったが、それでも自動車による機動性を駆使して、広範に動きまわり、ある程度の成果を上げることができた。

夜、宿舎での歓談は楽しく、また有志の方のスライド映写もあり、一時もクモから離れられない数日であった。他の分野から、ザトウムシの佐藤氏、ササラダニの鈴木氏の参加もあって話題も多彩で大いに勉強になった。高野先生の犬の交尾と陰莖骨のお話はたいへん面白く、印象に残っている。とにかく、有意義な合宿であったことは言うまでもない。

さてここに示した目録は、合宿中夕食後のミーティングにおいて、新海氏を中心に皆で各自が採集したクモの種名を決定した記録(松本氏のメモによる)をもとに、その後同定のできたものや参加者からの連絡によって現地での記録にもれたものを加えて、検討、作成したものである。合宿の成果として報告する。種類数は少ないが、ツリガネヒメグモ近似種、ツノオニグモ、キタグニオニグモ、キンカタハリオニグモ、ヤマキレミアグモ、キンヨウグモ、フクログモ一種など注目すべき種類が多い。

合宿中、運転の労をとられた新海、松本、高橋の三氏にこの場をかりてお礼申し上げる。

目 録

◎採集観察地域及び略号

A: 16-Ⅷ- '75	E: 17-Ⅷ- '75	内 野
B: '	F: '	浅間神社 (吉田口) コウモリ穴洞内
B': 18-Ⅷ- '75	G: '	コウモリ穴周辺
B ^o : '	H: 18-Ⅷ- '75	奥 富士山五合目
C: 17-Ⅷ- '75	I: '	平 野 スバルライン三合目
D: '		忍 野

◎y は幼生、e は卵のうを表わす。

◎♀♂記号の後の数字は発見された個体の推定される成長段階を示す。例えばy (+3) は3 齢幼生、♀ (-2) は♀の-2 齢、即ちあと2 回脱皮すれば成体となる♀の幼生という意味である。あくまで推定で飼育によって確められた訳ではないので絶対的なものではないが、ある程度の日安にはなり得る。ある場所におけるある時期の種類ごとの成長段階を知ることは重要であろう。推定できなかったものには(?)を付した。将来多くの種の生活史が調べられ、推定でなくクモの齢期が確認できるようになることを期待する。(詳しくは拙稿「クモの生活史研究の問題点及び齢期記録の一方法」Kishidaia (39): 49-54, 1975 参照)

◎学名の後の(*)印は幼生のために種まで同定できなかったものである。

◎標本は参加者各自がそれぞれ所有している。

ATYPIDAE	ジグモ科	
1. <i>Atypus karschi</i> Doen.	ジグモ	(A (住居))
AMAUROBIIDAE	ガケジグモ科	
2. <i>Amaurobius flavidorsalis</i> Yaginuma	セスジガケジグモ	(B♀, D♀)
ULOBORIDAE	ウズグモ科	
3. <i>Miagrammopes orientalis</i> Boes. et Str.	マネキグモ	(B♀)
LEPTONETIDAE	マシラグモ科	
4. <i>Masirana kyokoae</i> Yaginuma	スルガマシラグモ	(F♀♂)
PHOLCIDAE	ユウレイグモ科	
5. <i>Pholcus phalangioides</i> (Fuesslin)	イエユウレイグモ	(B♀ (-1))
THERIDIIDAE	ヒメグモ科	
6. <i>Chryso punctifera</i> (Yaginuma)	ホシミドリヒメグモ	(Cy (+3))
7. <i>Dipoena castrata</i> Boes. et Str.	ボカンミジグモ	(B♀ (-1))
8. <i>Enoplognatha</i> sp. (*)	ハガタグモ属一種	(Hy(?))
9. <i>Rhomphaea sagana</i> (Doen. et Str.)	ヤリグモ	(C♀, D♀♂)

KISHIDAIA 4640 1976, May

10. <i>Theridion</i> (s. lat.) <i>chikunii</i> Yaginuma	バラギヒメグモ	(B♀・e)
11. <i>T. japonicum</i> Boes. et Str.	ヒメグモ	(Ay (+3))
12. <i>T. pinastri</i> L. Koch	ムネグロヒメグモ	(B♀, C♀, D♀)
13. <i>T. rapulum</i> Yaginuma	ギボシヒメグモ	(I♀)
14. <i>T. sterninotatum</i> Boes. et Str.	ムナボシヒメグモ	(B♀ (-1))
15. <i>T. subadultum</i> Boes. et Str.	コケヒメグモ	(B♀, B'♀)
16. <i>T. tepidariorum</i> (C. Koch)	オオヒメグモ	(A♀)
17. <i>T. takayense</i> Saito	タカユヒメグモ	(B♀・e)
18. <i>T. yunohamense</i> Boes. et Str.	ユノハマヒメグモ	(G♀)
19. <i>T. sp.</i>	ヒメグモ属一種	(H♀)

本種はツリガネヒメグモ *T. angulithorax* Boes. et Str. の近似種で、同様のツリガネ住居をつくる。

NESTICIDAE

ホラヒメグモ科

20. <i>Nesticus latiscapus</i> Yaginuma	サイコホラヒメグモ	(F♀♂)
---	-----------	---------

LINYPHIIDAE

サラグモ科

21. <i>Arcuphantes sp.</i>	ヤミサラグモ属一種	(F♀)
22. <i>Labulla contortipes</i> (Karsch)	アシヨレグモ	(D♀)
23. <i>Neolinyphia nigripectoris</i> Oi	ムネグロサラグモ	(By (+2))
24. <i>Prolinyphia limbatinella</i> (Boes. et Str.)	フタスジサラグモ	(B♀ (-1), D♀)
25. <i>P. marginella</i> Oi	コシロブチサラグモ	(B♀, C♀)
26. <i>Tapinopa longidens</i> (Wider)	カナコキグモ	(B♀♂)
27. <i>Bathypantes robustus</i> Oi	クロテナガグモ	(I♀♂)

MICRYPHANTIDAE

コサラグモ科

28. <i>Tmeticus japonicus</i> Oi	ヌカグモ	(B♀)
29. <i>Oedothis osakaensis</i> Oi	オオサカアカムネグモ	(H♀)

ARANEIDAE (ARGIOPIDAE)

コガネグモ科

30. <i>Araneus</i> (s. lat.) <i>fuscocoloratus</i> Boes. et Str.	ヤミイロオニグモ	(B♀・♀ (-3), B♀, D♀)
31. <i>A. ishii</i> Kishida	イシサワオニグモ	(D♀ (-2), Iy(?))
32. <i>A. uyemurai</i> Yaginuma	ヤマオニグモ	(G♀ (-2))
33. <i>A. ventricosus</i> (L. Koch)	オニグモ	(A♀, C♀, Gy (-3))
34. <i>A. cornutus</i> Clerck	ナカムラオニグモ	(D♀)
35. <i>A. tsuno</i> Yaginuma	ツノオニグモ	(B♂ (-1), y (+3), B'y (+3))
36. <i>A. boreus</i> Uyemura et Yaginuma	キタグニオニグモ	(H♀)
37. <i>A. variegatus</i> Yaginuma	ニシキオニグモ	(B♂・♂ (-1)・♀ (-1), B'♀ (-1))

38. *Pronous minutus* (Saito) コオニグモモドキ (I♀)
 39. *Neoscona scylla* (Karsch) ヤマシロオニグモ (B♀(-1), D♀)
 40. *N. scylloides* (Boes. et Str.) サツマノミダマシ (B♀♂)
 41. *Zygiella montana* (C. Koch) ヤマキレアミグモ (Hy(-2))
 42. *Zilla astridae* (Str.) サガオニグモ (I♀)
 43. *Z. sachalinensis* (Saito) カラフトオニグモ (B♀, H♀)
 44. *Z. aurea* (Saito) キンカタハリオニグモ (H♀(-1))
 45. *Argiope bruennichii* (Scopoli) ナガコガネグモ (E♀)
 46. *Chorizopes nipponicus* Yaginuma ヤマトカナエグモ (B♀・e)
 47. *Cyclosa argenteoalba* Boes. et Str. ギンメッキゴミグモ (By(+3))
 48. *C. japonica* Boes. et Str. ヤマトゴミグモ (B♀, B'♀)
 49. *Meta menardi* (Latreille) サンロウドヨウグモ (F♀・♀(-1))
 50. *M. reticuloides* Yaginuma ヤマジドヨウグモ (G♀)
 51. *M. segmentata* (Clerck) キタドヨウグモ (Hy(?))
 52. *Nephila clavata* L. Koch ジョロウグモ (By(+4))

TETRAGNATHIDAE

アシナガグモ科

53. *Leucauge subblanda* Boes. et Str. コシロカネグモ (B♀, B'♀)
 54. *L. subgemma* Boes. et Str. キララシロカネグモ (B♀, B'♀, C♀)
 55. *Tetragnatha pinicola* L. Koch ミドリアシナガグモ (Hy(-3))
 56. *T. squamata* Karsch ウロコアシナガグモ (Ay(?))
 57. *Menosira ornata* Chikuni キンヨウグモ (By(+3), B'y(+3))

ARGYRONETIDAE

ミズグモ科

58. *Cybaeus* sp. ナミハグモ属一種 (H♀)
 59. *C.* sp. (I♀)

AGELENIDAE

タナグモ科

60. *Agelena opulenta* L. Koch コクサグモ (B♀♂(-1), C♀♂(-1))
 61. *Coelotes antri* (Komatsu) ホラズミヤチグモ (C♀)
 62. *C. modestus* Simon ヤマヤチグモ (B♀(-2), H, I)
 63. *C. kitazawai* Yaginuma アズマヤチグモ (G♀・e)

LYCOSIDAE

コモリグモ科

64. *Pardosa lugubris* (Walkenaer) エゾコモリグモ (H♀♂)
 65. *Trochosa terricola* (Thorell) カラフトコモリグモ (D♀)

THOMISIDAE

カニグモ科

66. *Oxytate striatipes* L. Koch ワカバグモ (B'y(-2))
 67. *Misumenops japonicus* (Boes. et Str.) コハナグモ (B♀・e, C♀, E♀)

68. <i>Synaema takashimai</i> (Uyemura)	アマギエビスグモ	(I y (?))
69. <i>Tmarus piger</i> (Walckenaer)	トラフカニグモ	(B y (- 2))
70. <i>Xysticus</i> sp. (*)	カニグモ属一種	(I y (- 2))
71. <i>Philodromus auricomus</i> L. Koch	キンイロエビグモ	(I y (- 3))
72. <i>P. roseus</i> Kishida	エビグモ	(B ⁿ y (- 2))
73. <i>Tibellus oblongus</i> (Walckenaer)	スジシヤコグモ	(I ♀ (- 3))
SALTICIDAE		ハエトリグモ科
74. <i>Hasarius doenitzi</i> Karsch	デーニツツハエトリ	(B ♀ ♂)
75. <i>Marpissa roemeri</i> Str.	オオハエトリ	(A y (?))
76. <i>Pellenes ususudi</i> Yaginuma	ウススジハエトリ	(B ♀ ♂, C ♀ ♂)
CLUBIONIDAE		フクログモ科
77. <i>Chiracanthium japonicum</i> Boes. et Str.	カバキコマチグモ	(D ♀, E ♀)
78. <i>Clubiona</i> sp.	フクログモ属一種	(H ♀ ♂)
HETEROPODIDAE		アシダカグモ科
79. <i>Heteropoda forcipata</i> (Karsch)	コアシダカグモ	(B ♀ (- 1))

富士山周辺のクモに関する文献

富士山周辺のクモに関する過去の記録、文献については検討する余裕がなかったので、ここでは参考のためその主なものを列挙するとどめる。

岸田久吉, 1928. 第9章蜘蛛類真正クモ目. 富士の研究VI. 富士の動物・富士の植物、古今書院
pp. 459-491

関口晃一, 1940. 山中湖及湖畔の動物相 (XII) 真正蜘蛛類(1) 博物学雑誌 38: 31-39

関口晃一, 1940. 同上 (XX) 真正蜘蛛類(2) 同 38: 6-13

関口晃一, 1943. 富士山及びその付近の動物 (XXVI)、洞穴産多足類・蜘蛛類及びその他二三
昆虫類についての小観察、同上 39: 44-46

八木沼健夫, 1971. 富士山の真正蜘蛛類 (予報) 富士山・富士急行㈱ pp.1018-1021

Yaginuma, T., 1972 The fauna of the lava caves around Mt. Fuji-
san. IX. Araneae (Arachnida) Bull. Nat. Sci. Mus. 15: 267-334

八木沼健夫・西川喜朗, 1973 7. 富士山の蜘蛛、富士山西斜面学術調査報告書 (昭和48年)

建設省中部建設局富士砂防工事事務所 pp. 120-147

滝山城趾のクモ

新海栄一

1975年10月10日、東京蜘蛛談話会の第11回観察会が都下八王子市滝山城趾において行なわれましたので、その時に観察、採集したクモのリストを報告致します。

当日の参加者：相本幸一、新井進、速藤博芳、大沼一富、小沢実樹、小野展嗣、熊田憲一、
(敬称略) 栗原輝代子、榎田重雄、榎田雅子、佐久間良三、佐藤秀樹、島添敏、新海栄一、
鈴木恵一、惣万昭二、高野伸二、蓮沼克巳、古浜隆、松浦祐司、松本誠治、
吉谷昭憲

目 録

ANTRODIAETIDAE

1. *Antrodiaetus roretzi* (L. Koch) カネコトタテグモ

ATYPIDAE

2. *Atypus karschi* Doenitz ジグモ

ULOBORIDAE

3. *Uloborus sybotides* Boes. et Str. カタハリウズグモ (y+2~3)

PHOLCIDAE

4. *Pholcus crypticolens* Boes. et Str. ユウレイグモ (♀♂-1~2多数)

MIMETIDAE

5. *Ero japonica* Boes. et Str. センショウグモ (y+3)

THERIDIIDAE

6. *Anelosimus crassipes* (Boes. et Str.) アシプトヒメグモ (y+2~3)

7. *Ariamnes cylindrogaster* Simon オナガグモ (y-2~3)

8. *Conopistha fur* (Boes. et Str.) フタオイソウロウグモ (y-2)

ツリサラグモ属のクモの網に止まっていた。このクモもヤリグモと同じようにクモを襲って捕食することがある。

9. *Rhomphaea sagana* (Doen. et Str.) ヤリグモ (y+3)

10. *Steatoda cavernicola* (Boes. et Str.) ハングツオスナキグモ (♀)

11. *Theridion angulithorax* Boes. et Str. ツリガネヒメグモ (y-3)

12. T. *chikunii* Yaginuma バラギヒメグモ (y+3~4多数)

13. T. *japonicum* Boes. et Str. ヒメグモ (♀. y+1多数)

KISHIDAIA 40 1976, May

14. *T. lunatum* (Clerck) カグヤヒメグモ (♀)
15. *T. sterninotatum* Boes. et Str. ムナボシヒメグモ (♀ - 1)
ツリサラグモ、ムネグロサラグモ、オオヒメグモなどの網に入り込み、その網の主を捕食する。
16. *T. subadultum* Boes. et Str. コケヒメグモ (♀)
樹の枝のつけね、石どうろう、石垣のすき間などに小さな不規則網を張る。
17. *T. tepidarium* (C. Koch) オオヒメグモ

LINYPHIIDAE

18. *Floronia bucculenta* (Clerck) ハナサラグモ (♀♂多数)
クマザサの根元近くに大型のシート網を張る。
19. *Neolinyphia fusca* Oi クスミサラグモ (y - 2多数)
20. *N. nigripectoris* Oi ムネグロサラグモ (y - 2 ~ 3)
21. *Prolinyphia longipedella* (Boes. et Str.) アシナガサラグモ (♀多数)

SYMPHYTOGNATHIDAE

22. *Mysmena jobi* Kraus ナンプコツブグモ (y - 1 ~ 2)

THERIDIOSOMATIDAE

23. *Ogulnius pullus* Boes. et Str. ヤマジグモ (y - 1 ~ 2)
22. 23 ともに 2 ~ 3 ヶ月で成体になるので、一年に 2 世代以上くりかえしている可能性がある。

TETRAGNATHIDAE

24. *Leucauge subblanda* Boes. et Str. コシロカネグモ (y + 2 多数)

ARANEIDAE

25. *Acusilas coccineus* Simon ハツリグモ (y + 3 ~ 4)
26. *Araneus macacus* Uyemura ヤエンオニグモ (y - 2)
垂直完全円網を張り中央部から呼糸を引き (呼糸円網)、近くの葉裏にひそむ。

27. *A. cucurbitinus* Clerck ハナオニグモ (y + 3 ~ 4)
28. *Argiope bruennichii* (Scopoli) ナガコガネグモ (♀♂. 卵のう)
29. *A. minuta* Karsch コガタコガネグモ (♀. 卵のう)
30. *Cyclosa sedeculata* Karsch ヨツデゴミグモ (♀. - 1 多数)
31. *Cyrtarachne inaequalis* Thorell オオトリノフンダマシ (♀. 卵のう)
32. *Meta yunohamensis* Boes. et Str. メガネドヨウグモ (y - 2)
33. *Nephila clavata* L. Koch ジョロウグモ (♀♂多数)
34. *Polys illepidus* C. Koch ゲホウグモ (y + 3)

枯木の枝先に脚をちぢめて止まる。滝山城趾付近にはかなり多く分布している。

AGELENIDAE

35. *Agelena opulenta* L. Koch コクサグモ (♀♂)
36. *Coelotes kitazawai* Yaginuma アズマヤチグモ (♀)

37. *C. modestus* Simon ヤマヤチグモ (♀)

PISAURIDAE

38. *Dolomedes sulfureus* L. Koch イオウイロハシリグモ (y - 2)

LYCOSIDAE

39. *Arctosa ebicha* Yaginuma エビチャコモリグモ (♀♂)

東京周辺のエビチャコモリグモの産卵期は、4月下旬から6月上旬までであることが確認されているため(地方によっては3月中旬頃より見られる)、今回採集された個体が産卵後の生き残りであるのか、4~6月の子グモが10月までに成体となり、このまま越冬して翌年産卵するのか観察する必要がある。

40. *Lycosa depectinata* (Boes et Str.) カガリビコモリグモ (y - 2)

本種も5~6月に成体が見られる。属は *Lycosa* とするのには疑問があるが今回は従来通りあつておく。 *Pardosa* が最も近いように思われる。

41. *L. coelestis* L. Koch ハラクロコモリグモ (y - 3)

42. *Trochosa terricola* (Thorell) カラフトコモリグモ (♀)

THOMISIDAE

43. *Oxytate striatipes* L. Koch ワカバグモ (♀♂, ♂ - 1)

44. *Philodromus subaureolus* Boes. et Str. アサヒエビグモ (y + 3 ~ 4)

45. *Thomisus labefactus* Karsch アズチグモ (y + 2)

46. *Tibellus tenellus* (L. Koch) シャコグモ (y - 2)

47. *Thanatus formicinus* (Clerck) ヤドカリグモ (♀♂)

48. *T. nipponicus* Yaginuma ヤマトヤドカリグモ (♀)

本種はヤドカリグモとヤマトヤドカリグモの中間型のような種類であるが、色彩より判断してとりあえずヤマトヤドカリグモに含めておく。

49. *Xysticus croceus* Fox ヤミイロカニグモ (y - 3)

SALTICIDAE

50. *Carrhotus xanthogramma* (Latreille) ネコハエトリ (y - 2)

C. detritus Boes. et Str. は1973年にポーランドの Proszynski により上記種のシノニムにされている。

51. *Hasarius doenitzi* Karsch デーニッツハエトリ (♂)

52. *Marpissa elongata* (Karsch) ヤハズハエトリ (y + 3)

53. *M. pulla* (Karsch) ヨダンハエトリ (♀)

54. *Myrmarachne japonica* (Karsch) アリグモ (♀, 卵のう, - 1)

シイの葉の表面に住居を作り、その中に卵のうを作る。

55. *Silerella vittata* (Karsch) アオオビハエトリ (♂ - 1)

56. *Harmochilus brachiatus* (Thorell) ウデブトハエトリ (♀ - 1)

KISHIDAIA 40 1976, May

CLUBIONIDAE

57. *Clubiona japonicola* Boes. et Str. ハマキフクログモ (♀♂)
 58. *C. vigil* (Karsch) ムナアカフクログモ (♀)
 59. *Itatsina praticola* (Boes. et Str.) イタチグモ (♀♂-1~2)
 60. *Orthobula crucifera* Boes. et Str. オトヒメグモ (♀)

ANYPHAENIDAE

61. *Anyphaena pugil* Karsch イズツグモ (♀-1)

GNAPHOSIDAE

62. *Zelotes pallidipatellis* (Boes. et Str.) マエトビケムリグモ (♀♂-1)

〔記号解説〕 和名の後の()内の数字は、小野展嗣(1975)論文を参考に、小野、熊田憲一、山川守、新海の4名が1975年6月より使用している記号で、次の意味を表わしている。

- 記号なし→(1年中各世代が見られるクモ) ♀♂ (♀♂の成体を示す)
 ♀-1 (♀の亜成体) y-1~2 (亜成体と後2回脱皮で成体になる幼生)
 ♀. ♀-1 (♀の成体と♀亜成体) y-2~3 (後2~3回脱皮で成体になる幼生)
 ♀. -1 (♀成体と♀♂不明の亜成体) y+2~3 (第2回~3回脱皮終了後の幼生)
 ♀. y+1 (♀成体と第1回脱皮後の幼生) 多数(10個体以上確認されているもの)

ま と め

10月10日「体育の日」に行なわれる談話会秋の観察会は、鳥屋、ダニ屋、ザトウムシ屋、出版関係者、画家、写真家など多くの方々の協力をえまして、史上最高の22名の参加をもって盛大に開催されました。採集された種数は人数の割にはのびず、前回(1971年5月23日)の時より2種少なくはありますが、1日の採集品としては順当なところだろうと考えております。

前回は春の調査で、今回は秋ですのでクモの種類にその差がはつきり現われており、5~7月にかけてのクモであるマネキグモ、ボカシミジグモ、カニミジグモ、ヒロハヒメグモ、ヤミイロカニグモ、アオオニグモ、ヌサオニグモ、ヤマシロオニグモ、チュウガタコガネグモ、コガネグモ、ゴミグモ、オオシロカネグモ、キララシロカネグモ、ウロコアシナガグモ、ハナグモ、コハナグモなどは姿を消して、逆に前回採集できなかったハナサラグモ、オオトリノフンダマシ、コガタコガネグモ、ナガコガネグモ、ジョロウグモなどが8~10月のクモとして現われて来ているのが特徴と言えるでしょう。しかしながら同じ春から夏のクモであってもアシブトヒメグモ、バラギヒメグモ、ムネグロサラグモ、クスマサラグモ、ハツリグモ、アサヒエビグモ、イズツグモなどは春から夏にかけての個体の子グモがすでに3~4齢幼生あるいは亜成体として出現しているのが興味深く感じられました。

10大ニュース

(運営委員会選定)

1974年度の10大ニュースと、1974年度の不足分1つをお届けします。

1974年度 その10

太平洋岸でイソコモリグモ

昨年度は1つ足りなくて9大ニュースしかあげることができませんでした。実は大きなニュースが1つもれていることがわかりましたので、ここにその10として追加します。登場するのは昨年度、ソメワケ、マメイタの発見で首位打者の賞禄をみせつけた高野伸二氏であります。9月5日青森県下北半島の鷹架(タカホコ)という所で、イソコモリグモを採集したものです。従来日本海側でしか分布が確認されていなかったため、太平洋岸からは初めての記録です。このホームランによって、高野氏は昨年度のニュースのなんと3割を独占したことになります。我々は氏に猛打賞を差上げたいと思います。

1975年度 その1

カトウツケオグモ 対馬に現わる

昨年度猛打賞に輝く高野氏、2打席連続アーチ。4月29日対馬の佐護の海岸を散歩していた高野氏は、マルバウツギの葉の上を散歩しているカトウツケオグモを発見した。まさに鳥の糞そっくりのクモで、しめったような光沢があるとのこと。この時思わず、「カトウツケオが出たから鳥はどうでもいいや」と言ったのを鳥が聞いたのかどうか、ねらっていた鳥はついに現われず、高野氏が対馬を去った次の日、待ちかまえていたように現われたとのことである。

その2

ゴマダラヒメグモ 相模川原で捕わる

相模川、神奈川県北部にある相模湖から、城山町、相模原市、厚木市を通して茅ヶ崎より相模湾に流れる。この川の左に位置する丹沢山塊は、日本の山地では最もよくクモの調査がされている地域で、現在のところ右に出る山はない。談話会の採集分科会といわれる「水曜会」(過激派ともよばれる)はこの相州丹沢を中心に結成されたグループである。この水曜会の審記局長にK. K. という人物がいる。日本中を走りまわり、国鉄などは顔を見ただけでフリーパスにするという実力者。採集技術は抜群で各地のクモ相にかなりの被害が出ているといううわさがある。その人物が5月12日相模川の河原でゴマダラヒメグモを採った。場所が丹沢の近くだけに他の者が採ったら石をぶつけられていただろう。何はともあれよかった。 終り。

(注……ゴマダラヒメグモ 1972年、長野県南安曇郡豊科町において千国安之輔氏により採集され、日本にいることが確認された。今回の採集は日本で2回目である。)

その3 富士山でキタグニオニグモを発見

6月、日本私学教育研究所の生物研修会に同行した新海栄一氏は、富士山吉田口五合目から登山道を下山中、キタグニオニグモ3個体を発見した。いずれもあと2回程の脱皮で成体になるくらいの大きさのものであった。その後、談話会の採集・観察会(8月18日)で富士山に行ったとき、高野伸二氏がやはり吉田口五合目で成体を発見した。これは、こわれかかった網のはしから少しはなれたところでコケの中にいたもの。その眼力は大変なものであった。同行した古浜氏・松本氏・新海氏・小野氏もそれぞれ写真を撮り、小澤氏は、ていねいな観察を行なった。

その4 クモを襲ったハエトリグモ3種

7月15日～18日まで高知県高知市を中心にクモの採集に行った高野・松本・新海・小野の4氏は、7月17日にハエトリグモが網にいるクモを襲ったところを目撃、目も口もふさがらなかった。デーニツハエトリが直径50cm程の網に占座していたコシロカネグモにとびついて網の中心でたべはじめた。クモ同士の距離は少なくとも30cmはあった。その日は風がふいていてコシロカネグモは網の中でゆれていたのでデーニツハエトリも見つけやすかったのかもしれない。4氏とも写真をセッセと撮った。また同じ日、ガード・ルールに造網していたジョロウグモの幼生にチャスジハエトリが目をつけ、アタックしたがジョロウグモは下にとびおりて無事だった。チャスジハエトリの方は、空っ腹をかかえてあきらめきれないようだった。ジョロウグモまでの距離は8cm程だったがあの三重網が案外ガードネットとして役立ったのかもしれない。またまた同じ日、石垣に直径10cm程の網を張っていたギンメッキゴミグモがシラヒゲハエトリに襲われたのを観察した。このときは、シラヒゲハエトリは5回くらいはとびついたのではないだろうか。風が吹いていて網がゆれるので見つけられたのだろうが、その風が目測をあやまらせたようで、いつもリーチが短かく失敗した。シラヒゲハエトリ君は、「七転八起」をしていたのか失敗後しばらくするとまたもどってきて、ついに目的を達した。みている4氏は「またきた、やるぞ、やるぞ」などといいながらこの興味ある行動を見守っていた。

その5 マメイタイセキグモ はりまや橋に現わる

土佐の高知のはりまや橋に「かんざし」を買いに出かけた小野展嗣氏は、その途中、市内の筆山公園に立ち寄り、クモをながめていたところ、ススキの葉裏にマメイタイセキグモを発見、同行者3名と造網行動(捕虫行動)を確認するため11時30分まで(8時30分から)ながめていたがついに動かず、そのまま持ち帰った。なお「かんざし」は買い忘れてしまったとのこと。

今年はマメイタイセキの当り年で、小野氏の他に神奈川県では高橋登氏と、トリノフンダマシ類採集の名人といわれる山川守氏が採集。また大阪でも往年の大家である八木沼健夫氏が吉野山で採集されている。八木沼先生によれば「クロトリノフンダマシと思って採ったところマメイタだった」とのこと。老眼の大家は心眼で見るとのうわさもある。もっとも談話会員にはマメイタと思ってソメワケトリを採った方もおられます。

その6

ヒメハナグモが採れるまで

ヨーロッパから北米にかけて広く分布するヒメハナグモは、日本では意外に珍しく、1969年、八木沼健夫氏が天皇陛下御採集による記録を報告〔昆虫と自然 4(3)〕して以来、北海道と茨城県で見ついているだけであった。ところが本年、長野県上田市において高野伸二、新海栄一、小野展嗣のクリナップトリオ3氏によって♀♂多数が発見された。採れておかしきクモではないので、今後、日本の寒冷地でよく探せば見つかるであろう。発見に至るまでの3氏の会話を参考のため再録してみると。

(車中にて) ——車の運転は、昨年交通安全協会の警察署長賞をもらいそこなった方の模範運転で、スピードメーターは12時頃をさしていたとのこと。——

T:「ヒメハナグモっていうのはあまり出ないの?」

S:「今回の採集の目的の一つですけど、どうでしょう。いて不思議じゃないですけど」

O:「ハナグモと同じ環境でしょうから、それにここはかなり標高があるのでいるかも知れません。それらしい所があったらいっちょやってみましょうか。」

T, S, O:「よし」

T:「今度、草原があったら止めて下さい。」

(S氏、いくつも路傍の草原を通りすぎるが、何となく とある草むらの中へ車をつっこむ、恐ろしいカンという他はない。)

O:「よし、めちゃくちゃにスウィーピングだ。」

(T, S, 氏はゆっくりと見つけどりなので、草原を3等分し、その一角をO氏、必死にガサガサとスウィープする。)

O:「いた!」 (やはり能率的か?)

その後3氏はゆっくり1時間以上そのヒメジョオンの草むらで観察し、それぞれ♀♂3つずつ採集し、あっけない幕切れ。その後飼育して、交尾などを多数撮影された由。 それにしても高野氏は今年も猛打賞

その7

東亜クモ学会 第7回大会 三重県で開かる

毎年行なわれて第7回になれば、もうニュースの中には入れる必要もないかもしれないが、三重県津市洞津会館で行なわれた大会は、台風のために乱れた列車の後遺症の影響を受けた。そのため、出席予定者の数名が参加できなかったのは残念であった。12の講演は、生態5、分類4、形態1、細胞1、分布1の内容にわたった。また近藤昭夫氏による「クモ胚発生の観察」の実演は、大会初の内容であった。分科会は①形態・発生、②分類・分布、③生態の3科に分れて行なわれたが、形態・発生の部会には5名が集まり、充実した話ができた。最後に、実行委員の太田定浩・貝窪憲治両氏の労をねぎらいたい。

——→その8以後は42ページ——→

小 観 察 あ れ こ れ (5)

高 野 伸 二

○対馬のカトウツケオグモ

1975年4月29日、対馬の北部、上県町佐藤の海岸に近い低木（多分マルバウツギ）の葉上にいるカトウツケオグモを発見した。手でさわると糸をひいてぶら下り、足をちぢめていたが、全くクモとは見えなかった。採取して持ち帰り飼育したが、その色や斑紋、腹部のぬれているような感じ、驚いて足をちぢめて動かなくなった時の形など、ひじょうに、新しい鳥のふんに似ていた。このクモにハエやチョウが誘引されて来ることはないかと思ひ、ハエの多い場所へ持って行って草の上に放し、2時間位ずつ3回観察した限りでは、特にそのようなことはなかった。あたえたえさ（ハエやガ、シジミチョウ）をよく食べ、約50日間生きていたが、ついに産卵はしなかった。未交尾であったのかも知れない。6月20日に死んだ。

○コガネグモを食べたヒヨドリ

ことし（1975年）は都下でもコガネグモが比較的多く目についたが、7月上旬に石川県と千葉県から数匹のコガネグモの成体を持って来て庭に放した。7月10日から5匹がいついて、造網するところやかくれおびをつける所など観察でき、毎日楽しみにしていた。3日目の7月12日の夕方、二階の窓わくにヒヨドリがとまっているので、驚いて見ると、どうもその前の空間に網をはっているコガネグモをねらっているらしい。その時はすぐに追い払ってことなきを得た。次の日の正午近く、いちばん低い所に網をはっているコガネグモをヒヨドリが空中停飛をしたと思ったら、くわえて飛んでいった。しまったと思って庭に出て他のクモをさがしたが、すでに一匹もいなくなっていた。現場を見たのは一匹だけであったが、朝のうちから次々とやられたのであろう。ヒヨドリは数年前から自宅附近に夏も残り繁殖するようになった鳥で、それ以前には夏はいなかった。一方コガネグモは近年減り、成熟個体を自宅附近で見るとはほとんどなくなってしまった。アンバランスの自然界を考えさせられる事件であった。

○都下のゲホウグモ成体

1975年7月28日、八王子市小宮の丘陵へ行った。こなら林の切れた所で休み、立ったままジュースを飲みながら路傍のササの葉うらにクモの卵のうを見つけた。ふわふわした白い糸のまわりに赤い糸のまつわりついた例のゲホウグモの卵のうである。そう言えばここは、毎年秋にゲホウグモの幼生を枯れ枝をばらばらして見つける滝山の続きである。さて今度こそはと卵のうのまわりの枯れ枝や木の幹をくわしくさがしたが親はいない。卵のうから1m位はなれた所に径5cm位の枯れ木が立っていたのでそれもゆすって見たが何も落ちて来ない。半ばあきらめたが、その枯れ木にまきついているフジのしげみを見ると、相当太いクモの糸が数本、垂直に約30cmはってあり、その上の地上3m位の

フジの複葉の根元に黒いかたまりが見えた。半信半疑、静かに引き寄せてみると正にゲホウグモで、体長17mmの大きな個体であった。前、横、後、斜めと撮影した。腹部前縁にそう大きな突起はない個体であったが、足をちぢめじっとすることが多く、そうなると古い虫えいのようでクモとは見えな
い。夜間円網を張るところを観察しなかったが、実現出来なかったのは残念。

○ヒメバチ幼虫とセンシヨウグモ

1975年8月14日、神奈川県飯山観音のコンクリート製の欄の下で、オオヒメグモを食べているセンシヨウグモを見つけたが、このオオヒメグモにはクモヒメバチの体長4mm位の幼虫が寄生していた。つまりオオヒメグモはクモヒメバチとセンシヨウグモの両者から食べられていたわけである。クモヒメバチの幼虫は成長がはやいのがふつうで、管びん内にクモと共に収容すると2~3日でまゆを作る。

しかしこのクモヒメバチは結局4日目に死んでしまった。おそらく宿主のオオヒメグモの一部がセンシヨウグモに食べられたために成熟できなかつたのであろう。ヒメバチにとっては不幸なアクシデントであったと言えよう。

○横のかくれおびをつけたナゴガネグモ

ナゴガネグモのかくれおびの形については、従来注意して観察しているが、大部分はたて型（I字型かその変形）である（このことについてはいずれ報告する）。1975年10月7日神奈川県東丹沢の草原で観察した1ヶ体は横に一文字形のかくれおびを張っていた。

クモは垂直地位、つまり頭を下にしたふつうの占座であった。この個体を放飼して、かくれおびの形の変化を観察すればよかつたのであるが、撮影したのみで帰って来てしまったのは遺憾であった。

○脱皮の二つの形式

クモが脱皮して生長することは知られているが、脱皮に2つの形式があることは案外知られていない。1つは、クモの本にもよく図がのっている一般的な形で、頭胸部のふたが前端からとれて、体が上下2つにさけるもので、脱皮殻では頭胸部のふたが腹端についている。もう1つは頭胸部のふたが後端（腹部に近い方）からはなれ、前端で脱皮殻についている形である（この形式では脱皮後、ふたが脱皮前と同じようになっていることや殻からはなれて落ちてしまうことも多い）。どのクモがどちらの形をとるかに私は関心を持っているが、観察例は多くないので、ここにこの問題にふれ、会員の皆さんの御協力で、たくさんの例が築められたらと思っている。

私が見た例では前の形をとるものにはジグモ、コガネグモ科の多くの種、ヤマトガケジグモ、ハシリグモ類、コモリグモ類、カバキコマチグモ、ハエトリグモ類、イエユウレイグモ、カニグモ類等があるが後者の例は比較的少く、アシダカグモ類、エビグモ類、ジョロウグモだけである。系統的に近いものは同じ形式ではないかと考えていたので、カニグモ科の中のカニグモ類とエビグモ類でちがうことやコガネグモ科の中でジョロウグモだけがちがうことなどは意外であると共に興味をおぼえた。最近 Homann がカニグモ科の中でカニグモはコモリグモに近く、エビグモはアシダカグモに近い

という意見を発表しているときいたが、エビグモとアシダカグモが脱皮の形式でも同じという点でもしろうと思った。

コガネグモ科の中でジロウグモ以外にも後の形をとるものがあるか、チリグモとヒラタグモは同じ形式か、シャコグモやヤドカリグモはどちらの形式かなど、すぐ思いつく問題点であろうが、一方では、同じ種類、いや同じ個体では、常に同じ形式かという根本的な事も、改めて確認する必要がある。

キジロオヒキグモ *Arachnura logio* Yaginuma の自宅観察メモ

松 浦 祐 司

〔I〕はじめに

この蜘蛛については、私が1972年9月と1975年8月に、丹沢山塊の南のふもとにて採集したものを、自宅へ持ち帰り庭で放し飼いにした時、私が気付いた事だけをメモしたものである。

〔II〕採集地の現状

1972年蓮沼氏のサカグチトリノフンダマシ、今年(1975年)の山川氏のマメイタイセキグモの採集地としても御存知の方も多いものと思われるが、この地域は丹沢山塊の南のふもとに位置して、夏期には登山者や行楽者で結構混雑する場所で、大倉と呼ばれている所である。

高校の時の生物クラブでの月例会宿等で確認した限りでは、蜘蛛の種・数とともに、昆虫類の種・数も多い地域であった。昆虫類の中には、比較的稀といわれ、蜘蛛の卵のうを幼虫の時に食べるカマキリモドキが数頭、誘蛾灯を目ざして飛来したことから考えても、興味多いものと思われる。

キジロオヒキグモの採集場所の状態は、杉林に面した林道で、沢が道を横切り、日当りの悪い、湿気が多い場所であった。1975年の採集場所は1972年に採集した杉の木より、林道(1.5m)を隔てただけの全く同じ地点である。

〔III〕観察

1. 網について

直径15~20cmほどのキレ網を、1m程の高さに垂直・水平・傾斜のいずれの方向にも張った。採集地においては、2回とも1m60~90cm程の高さに、垂直キレ網を張っていた。網の色は全体に乳白色であった。

縦糸の数は、網の大きさによって多少異なるが、9~11本であり、横糸の数は、10~15本程度であった。縦糸だけ(信号糸)のところには、あとで記すが、カモフラージュを施してある。

このクモは、ビジョオニグモやアオオニグモのように、信号糸の端に住居を持つ網や、ハツリグモのような、信号糸上に吊した枯葉の中に潜むような形態の網を張ることはなかった。

2. カモフラージュについて

信号糸上にほとんど自分の体色と同じ黄褐色の枯葉か、自分の脱皮がらを吊していた。しかし、ゴミグモのように、網の中央部を上から下までカモフラージュするのではなく、蜘蛛の上部に1~2枚の枯葉をつけるだけにすぎぬが、枯葉の色が極度の乾燥などの要因によって、大幅にクモの色彩と差ができた場合は、網の張り替えの時かどうかはよくわからぬが、その枯葉を下に落していた。

1972年に採集した時は、杉の枝の間であったが、信号糸上に吊してある枯葉は広葉であり、この蜘蛛がこの枯葉を他の木からもってくるのか、また、下の落ち葉を釣り上げるのか、もしくは、偶然に風などによって網にかかった物をつかうのかは、よくわからない。なお1975年に採集した時も杉の木ではあったが、カモフラージュの為の枯葉は吊していなかった。

3. 網上でのクモの静止状態

第1脚と第2脚を2本ずつそろえ、触肢とほぼ同じ位置で糸につかまり、第3脚は、胸板側後方で糸につかまり、第4脚は、出糸突起よりやや後方に位置する。出糸突起は、占座点にしっかりと接着してある。(図Ⅰ参照)

4. 威嚇

指を近づけたりしてこの蜘蛛に危険を感じさせると、ナガコガネグモほどではないが、第1脚と第2脚のみを、屈伸させて網をゆすった。さらに蜘蛛の体に触れたりすると、腹部後端(出糸突起より下部は自由に動いた)の尾状部分を極度に彎曲させて(一見サソリのような感じ)威嚇するが、ナガコガネグモのように下へ落ちてしまうことはなく、威嚇した状態のまま信号糸上を登ってゆき枝の上で静止してしまふ。(図Ⅱ参照)

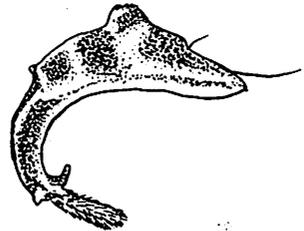
5. 獲物の捕獲方法

蠅等の餌になる昆虫が網にかかると、蜘蛛は、第4脚を使って捕帯をくり出し獲物にからめつけるが、ある程度からめつけると、第3脚を使って獲物を回しながらさらに捕帯をまきつけてゆき、まき終った時に両側の糸を切り、網の中央へもってゆき体液を吸りまでの過程は、ナガコガネグモやコガネグモ等と全く同じようであった。

図Ⅰ



図Ⅱ



(V) 後記 飼育期間について

1972年9月10日に採集して以来、9月10日夜から自宅で網を張り、11月中旬まで庭で放し飼いにした後、これより飼育瓶に移し室内にて飼育し、1973年4月22日まで生存。

1975年8月24日に採集した方は、明らかに卵を持っていると思われ、1週間室内で飼育したが、卵のうをまだ作りそうもないため庭に放したところ、2日間は網を張っていたが、逃げられたのか、スズメに食われたのか、見あたらなくなってしまい残念な思いをした。

以上の記録は、1975年8月に採集した蜘蛛が、10日ほどしか手元にいなかったため、大部分が1972年9月に採集したものの、観察メモをまとめたような次第です。

観 察 日 誌

佐久間 良 三

私が自宅（小田原市内）の庭先などで観察した事を次に報告しておきます。なお、観察時に思った事なども記録中に「疑問、推測」として記しておいた。

20-X- '71

キノポリタテグモ 巣から多数の子グモが糸を引いて出ていた。

2-X- '71

メガネヤチグモ 体長15mm程の雌を標本用管瓶中で飼育する。飼育開始後約10分で、管瓶の中央部にシート状の網を張る。クモに蛾（体長約5mm、種不明）を与え、クモが蛾を捕食している間管瓶を横にして下敷の上で何回も転がしてみたが、クモは蛾を捕えたまま静止していた。

3-X- '71

ヒラタグモ 直径3cm程の巣を壊してみる。中に卵のうが4つあった。卵のうの内1つは大きな穴があいていて既に子グモが外に出た後であった。1つは14匹の子グモが中にいてあまり活発には動いていない。この子グモの腹部背面の斑紋は灰色であるが微かに確認できる。1つは14匹の子グモが中にいて、子グモはほとんど動かず脚を多少動かす程度である。この子グモの腹部背面の斑紋は確認できない。1つは10匹の子グモが中にいて、子グモは全く動かずその体は丸く球の様である。

3-X- '71

マネキグモ 体長6mm程のもの発見。

ヌサオニグモ 体長5mm程のもの発見。

オオヒメグモ 体長約4mm全体黒褐色の雄で腹部側面に幼虫（種不明）を1匹付着させているもの発見。幼虫の大きさは約2mmで全体白色半透明である。

4-X- '71

オオヒメグモ 体色の異なる(褐色と黒褐色)ものが軒下でお互いに20cm程離れて巣を作っていた。疑問:体色変異は先天的なものによるのだろうか。またオオヒメグモに体色変異が著しいのは何故だろうか。

5-X-'71

バラギヒメグモ 体長2mm程のもの発見。

7-X-'71

オオヒメグモ 10月3日に発見したオオヒメグモの腹部側面に付着していた幼虫は何処にも見つからなかった。その代わりにオオヒメグモの巣の中央部に長さ10mm程の楕円形の繭がぶら下がっていた。繭全体は糸でかがってあり、中に長さ3mm程のサナギらしいものがやや透けて見える。クモはこの繭に対しては特別な関心を示していないようだ。

10-X-'71

マネキグモ 体長3mm程のもの発見。クモの行動をしばらく観察する。初めクモは図1の様に糸にぶら下がっていた。その後クモは体を糸と平行にし、第一脚・第二脚を用いて前方(クモから見て)の糸を手繰り寄せ、手繰り寄せた糸を顎でくわえ、またそれと同時に後方にある糸にクモ自身が出す糸をつなげて、前方へ進んだ。(図2参照)もとの位置に戻る時は図1の様に一旦糸にぶら下がり体の向きを変えて前と同じ動作を繰返した。

12-X-'71

メガネヤチグモ 10月2日より管瓶中で飼育しているもの図3の様なトンネル状の網を張る。

19-X-'71

メガネヤチグモ 10月2日より飼育しているもの図4の様に少し網を作り変える。

22-X-'71

オオヒメグモ 以前より観察していたものが昨夜産卵したらしく巣に新しい卵のう(大きさ8mm×4mm程度)があった。他にも以前の卵のうが2個あった。(図5参照) 疑問:何故卵のうはクモよりも総て上にあるのだろうか。

2-XI-'71

オオヒメグモ 体長約4mm全体褐色のものが体長17mm程のアカサシガメを捕える。

5-XI-'71

バラギヒメグモ 体長2mm程のもの発見。

ゴミグモ 体長7mm程のもの発見。

24-VI-'75

ササグモ 葉上にいるものに近づくと反射的に葉の裏側に隠れる。さらに接近して脅かすとクモは逃げ出してしまふ。疑問:葉上にいるクモを脅かすと何故葉裏に隠れるのだろうか。推測:重力や光の方向、光の強弱の違いによって葉の表裏を区別しているのだろう。

6-VII-'75

オオシロカネグモ 体長10mm程のもの軒下にて発見。

KISHIDAIA 40 1976, May

8-VII- '75

ヒメグモ 体長約4mm全体褐色の雌の巣の端に体長1~2mm全体赤褐色のヒメグモが3匹いるのを見かける。

17-VII- '75

ギンメッキゴミグモ 体長2mm程のもの窓際にて発見。

ジョロウグモ 体長5mm程のもの発見。

マネキグモ 体長3mm程のもの発見。

27-VIII- '75

クサグモ 巣にニイニイゼミが掛かっているのを見かける。

ギンメッキゴミグモ 体長約7mm腹部の大きい雌を管瓶(長さ9cm、直径3cm)中で飼う。

29-VIII- '75

ギンメッキゴミグモ 7月27日より飼っているもの昨夜産卵したらしく直径5mm程の円墳状の卵のうが管瓶内側上部に付着していた。(餌を与えなかったためかクモは翌日死亡し、卵はその後かえらなかつた。) 疑問:狭い空間に入れられるとクモの産卵時期は普通の場合よりも早くなるのだろうか。

26-IX- '75

アシダカグモ ゴキブリ取り器(ゴキブリホイホイ)の中で体長15mm程の雄が1匹死んでいるのを見かける。

アシダカグモ 体長15mm程の雄が室内を徘徊しているのを夕方から夜中にかけてよく見かける。最近特に見かける。(ヒラタグモについても同様な事を見かけた。) 疑問:この現象は雌の放つ性的誘引物質などによるものか、雄の季節的生理変化によるものか。また前記のものとの関係はあるのだろうか。

以上かなり断片的な観察が多いが、記録として残しておけば将来の研究の資料として役立つ事があるかもしれないと思ひ報告してみた。

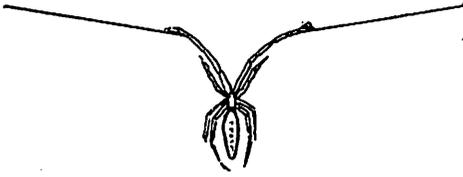


図 1

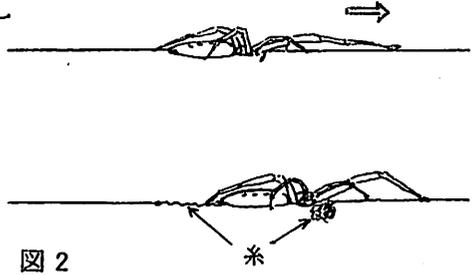


図 2

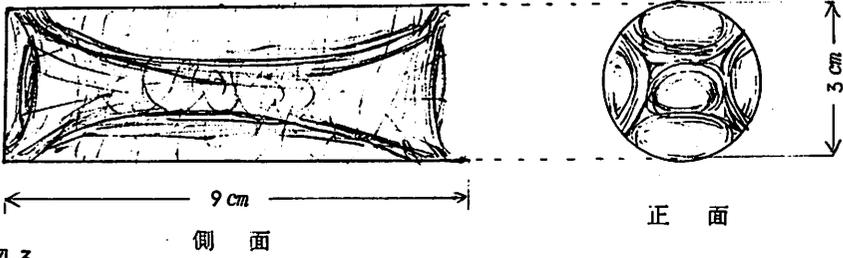


図 3

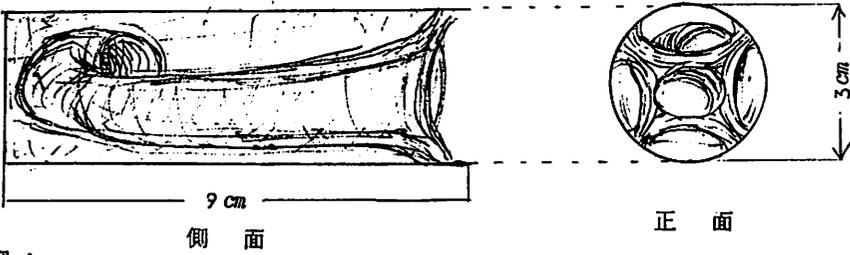


図 4

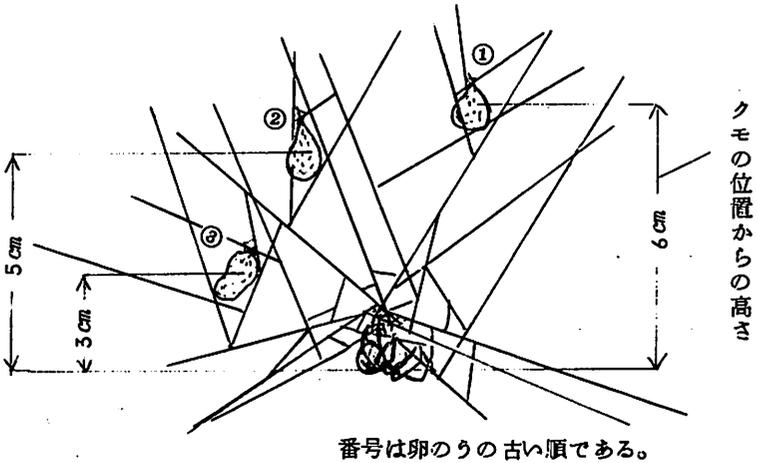


図 5

クサグモの生活史

鈴木 勝 浩

(松伏中学校3年)

1972年4月から1975年9月のあいだ、クサグモの屋外観察と飼育観察を行なって、だいたいの生活史をつかむことができましたので、報告いたします。

観察場所は、家にある常緑のアオキの生垣と高さ2mほどのクリスマス用のモミの木で、飼育については、去年はアオキの葉で採取した卵のうを、そして今年は第2令頃の子グモを、屋外より持ち帰り、コーヒーなどの円筒の形をしたあきびんで飼育しました。この容器の大きさは底面の直径は約8cm高さ約16cmです。餌として、シウジョウバエ・カ・イエバエ・ウンカ・ヨコバイなどを与えました。その他、水は小さなシャーレに入れて、1週間おきにとりかえました。また、飼育びんは成長に応じてとりかえました。

以下に観察と飼育の結果を一緒にして、クサグモの生活史を記して行きます。

○9月下旬から10月下旬にかけて孵化した子グモ(第1令幼生)は、卵のう内で第1回の脱皮をして第2令幼生となる。〔孵化は、卵がふくらみを帯びてから約7日後に行なわれた。なお、これは、卵の発育をみるため、卵のうの一部を切りとって、セロハンをはっておき、調べました。〕そして、第2令幼生のまま、越冬を行なう。

○翌年2月下旬～3月にかけての間に、子グモは自ら卵のうに4～6個の穴をあけて、頭胸部を先にして卵のうから出てくる。〔共食いの現象はみられなかった。卵のうの一部を切りとって、セロハンをはって調べた。〕

○卵のうから出て来た子グモは、“まどい”の状態に入る。〔まどいは、日影に移り、糸をはりめぐらせて行なわれた。また仲間から絶対に離れることはなかった。〕

○その後、空中飛行を行なう。〔観察では卵のうから出て6日後の、晴天・無風(微風)の朝6時から8時ごろにかけて空中飛行は行なわれた。クモは高い枝の先端にのぼっていき、腹部を空に向け、糸をだし旅立った。〕

○第2令幼生から成体までの外形・色彩の変化は次の通りになった。(飼育による生長は表を参照して下さい。)

第2令：頭胸部は濃赤褐色。腹部は黒褐色。

第3令：第2令とほぼ同じ。

第4令：頭胸部背甲に黒褐色の対斑が現われる。腹部には、やはず状の薄い白色斑が現われる。

第5令：背甲の対斑が太くなる。腹部には3対のやはず状の白色斑ができる。

第6令：腹部のやはず状の白色斑が4対になる。

第7令：腹部のやはず状の白色斑が5対になり、腹部の斑紋は複雑になる。

第8令：頭胸部の地色は赤褐色になる。腹部の斑紋は複雑。

第9令（成体）：全体が淡赤褐色になる。腹部の白色斑は5対。

◎第9令で成体になった後、8月中旬～下旬頃に、交尾が行なわれる。（雄は右第1脚を上下にふるわせ、雌を招くような動作をする。雌が反応をしめすと、雄は雌の住居に入り込み、トンネル内で交接をする。その後、雌は雄を食べてしまった。）

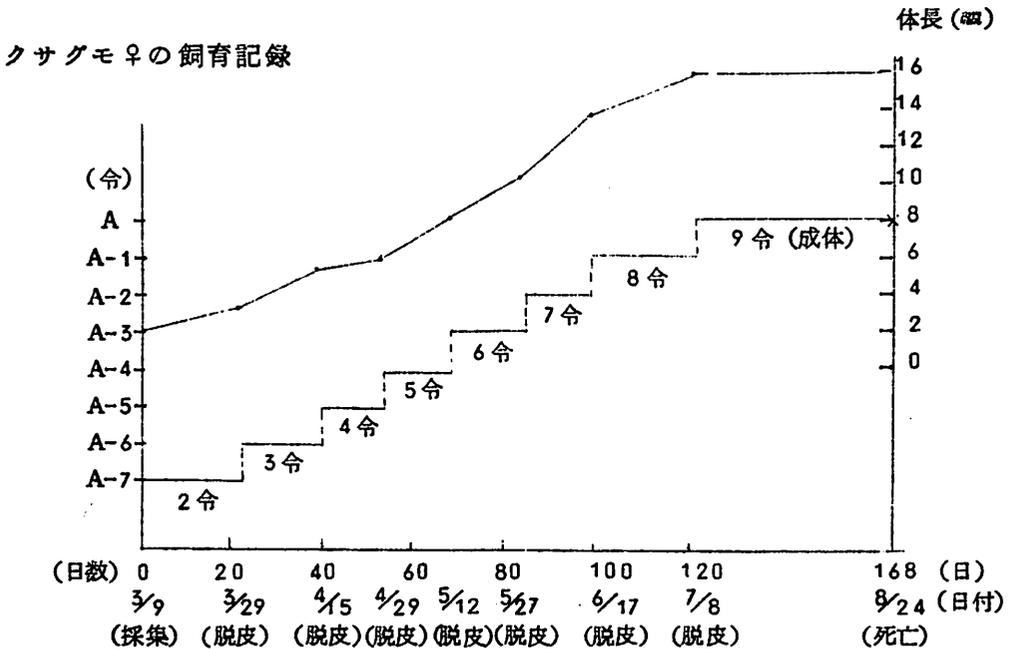
○雌は8月中旬～9月上旬にかけて、住居をすてて、産卵場所へ行く。（産卵場所は、冬でも葉が茂っているような場所で、アオキやマサキなどの葉に多かった。）

○晴天の日の夜間に産卵が行なわれ、雌は、産卵後も産室内にとどまっている。（卵のうは、白色で、形は多面体。卵は白色から青色で、直径約1mm。1卵のう内の卵の数は、80～100個位あった）

これらのことから、クサグモの生活史については、次のことがいえると思います。

- ① 1卵のう内の卵の数は80～100個。
- ② 越冬は、第2令のとき卵のう内で行なり。
- ③ 成体になるまでの脱皮回数は、卵のう内のものも入れて8回ぐらいで、第9令の時期を経て、成体になる。
- ④ 雄は雌の網を訪れて、トンネル内で交接をする。
- ⑤ 産卵場所は、従来の網ではなく新たに産室を作る。
- ⑥ 脱皮の回数は一定ではない。（成熟後は、脱皮をしない。）
- ⑦ 1年1世代で、産卵は夏の終りから秋に行なわれる。

下の表は小野展嗣氏（KISHIDAIA Ⅲ39 1975）の表の体裁に習って作成しました。体長は、ピンを通して、モノサシで測りました。



KISHIDAIA Ⅲ40 1976, May

野外観察・飼育観察からわかったクサグモの生態

○網について…生垣などに、糸を縦横に張りめぐらした棚網を張る。(糸には、オニグモの横糸のような粘球はない。)トンネル状の住居をもつ。野外のものには、トンネル状のまわりを、木の葉でつつんだものが多い。

○餌のとり方…トンネル状にかくれているクモは、棚網にかかったえものの振動が伝わると、すぐに出てきて、えものに牙を打ちこむ。そして、それをトンネル状にもって行って捕食する。(大型のえものや、雨の日には、えものがかかっても、すぐには牙を打てないようである。なぜなら、網から脱しようとするえものの振動が大きいためである。こんなときクサグモは、右に左に何回も糸を出しながらえものまわりを回る。やがて、えものの振動が静まってくると牙を打つ。)

○雨のときのクモ…いつもと同じようにトンネル状の中にいる。雨のときでも、昆虫などがかかると、捕食するようだ。

○クサグモの層状網について…クサグモを狭い空間に閉じこめたらどうかと思い、直径8cmのびんに入れておいたら、かわった網をつくった。2日目頃までは、不規則な網を張っていたが、3日・4日たち、1週間たつと、6段の棚網が張られた。中央には縦につらねたトンネルがつくられていた。このことから、クサグモはただ本能的に平屋を作るのではなく、環境に応じてその本能をかえることがわかった。(この実験は、八木沼健夫先生が著わされた「クモの話」(1969・北隆館)の本に記されていたものを試みたものです。)

「水蜘蛛」

むかし奥州の半田山の沼で、夏のころにある人が釣りをしていますと、珍しくその日はたくさん魚が釣れて、わずかな間に魚籠が一ぱいになりました。ひどく暑い日であったので、その人は既に足で沼の中にひたしていましたが、どこから出たものか一匹の水蜘蛛が、水の上を走ってきて、その足の拇指に糸をひっかけて行った。そうして間もなくまた来ては同じところに糸をかけるので、ふしぎに思ってその糸をそと拇指からはずして、傍にあった大きな柳の株に巻きつけておきました。そうするとやがて沼の底で、次郎も太郎もみな来いと大きな声で呼ぶ者がありました。そのうちに沼では大勢の声で、えんとえんやらさあというかけ声とともに、その蜘蛛の糸をひっぱりはじめ、見ている前で太い株根っこが、根元からぽっきりと折れてしまったそうです。その時から後は誰ひとりとして、今にこの沼へ釣りにゆく者はないそうです。

(福島県伊達郡)

〔資料〕

柳田国男著「日本の昔話 改訂版」角川書店 昭和35年版 52ページ 24水蜘蛛より

上のような記事を見たので記録し、紹介しておきたい。話の中の「水蜘蛛」は、種名を決定するのも必要でないと思うが、——話はそれだけで楽しいものであるから——「水の上を走る」様なので、ハシリグモやコモリグモなどの仲間では本当のミスグモではないかもしれない。しかし、このように蜘蛛に関する民話は各地に見られる様で、(KISHIDAIA(20/21):7-8)これは昔から人々が生活の中で蜘蛛を身近なものとして感じていた証拠であると考える。(佐久間良三)

あっちこっちのくも

熊田 憲一・山川 守

I 山形県山寺

採集日：1975年6月2日・9月3日

ATYPIDAE

ジグモ科

1. *Atypus karschi* Doenitz ジグモ

AMAUROBIIDAE

ガケジグモ科

2. *Amaurobius flavidorsalis* Yaginuma セスジガケジグモ

3. *Titanoeca nipponica* Yaginuma ヤマトガケジグモ

ULOBORIDAE

ウズグモ科

4. *Uloborus sybotides* Boes. et Str. カタハリウズグモ

5. *U. varians* Boes. et Str. ウズグモ

6. *U. yezoensis* (Saito) エゾウズグモ

THERIDIIDAE

ヒメグモ科

7. *Ariamnes cylindrogaster* Simon オナガグモ

8. *Dipoena flavomarginata* Boes. et Str. キベリミジグモ

9. *Enoplognatha transversifoveata* (Boes. et Str.) カレハヒメグモ

10. *Episinus affinis* Boes. et Str. ヒシガタグモ

11. *Theridion angulithorax* Boes. et Str. ツリガネヒメグモ

12. *T. chikunii* Yaginuma バラギヒメグモ

13. *T. japonicum* Boes. et Str. ヒメグモ

14. *T. lunatum* (Clerck) カグヤヒメグモ

15. *T. tepidariorum* (C. Koch) オオヒメグモ

16. *T. takayense* Saito タカユヒメグモ

LINYPHIIDAE

サラグモ科

17. *Labulla contortipes* (Karsch) アシヨレグモ

18. *Linyphia oidedicata* (Helsdingen) ヘリジロサラグモ

19. *L. clathrata* Sundevall コウシサラグモ

20. *Neolinyphia fusca* Oi クスミサラグモ

21. *N. japonica* Oi ツリサラグモ

22. *Prolinyphia limbaticella* (Boes. et Str.) フタスジサラグモ

23. *P. longipedella* (Boes. et Str.) アシナガサラグモ

24. *P. yunohamensis* (Boes. et Str.) ユノハマサラグモ

	ARGIOPIDAE	コガネグモ科
25.	<i>Acusilas coccineus</i> Simon	ハツリグモ
26.	<i>Araneus ventricosus</i> (L. Koch)	オニグモ
27.	<i>A. cornutus</i> Clerck	ナカムラオニグモ
28.	<i>Yaginumia sia</i> (Strand)	ズグロオニグモ
29.	<i>Zilla sachalinensis</i> (Saito)	カラフトオニグモ
30.	<i>Argiope bruennichii</i> (Scopoli)	ナガコガネグモ
31.	<i>Cyclosa octotuberculata</i> Karsch	ゴミグモ
32.	<i>C. sedeculata</i> Karsch	ヨツデゴミグモ
33.	<i>Meta yunohamensis</i> Boes. et Str.	メガネドヨウグモ
34.	<i>Nephila clavata</i> L. Koch	ジョロウグモ
	TETRAGNATHIDAE	アシナガグモ科
35.	<i>Tetragnatha praedonia</i> L. Koch	アシナガグモ
36.	<i>T. squamata</i> Karsch	ウロコアシナガグモ
	UROCTEIDAE	ヒラタグモ科
37.	<i>Uroctea compactilis</i> L. Koch	ヒラタグモ
	AGELENIDAE	タナグモ科
38.	<i>Coelotes insidiosus</i> L. Koch	シモフリヤチグモ
39.	<i>C. luctuosus</i> L. Koch	メガネヤチグモ
	PISAUROIDAE	キシダグモ科
40.	<i>Pisaura lama</i> Boes. et Str.	アズマキシダグモ
	THOMISIDAE	カニグモ科
41.	<i>Oxytate striatipes</i> L. Koch	ワカバグモ
42.	<i>Xysticus croceus</i> Fox	ヤミイロカニグモ
	SALTICIDAE	ハエトリグモ科
43.	<i>Marpissa roemeri</i> Strand	オオハエトリ
44.	<i>Myrmarachne japonica</i> (Karsch)	アリグモ
45.	<i>Plexippus annulipedis</i> Saito	マダラスジハエトリ
46.	<i>Dendryphantas atratus</i> (Karsch)	カラスハエトリ
	CLUBIONIDAE	フクログモ科
47.	<i>Phrurolithus nipponicus</i> Kishida	ウラシマグモ
	ANYPHAENIDAE	イズツグモ科
48.	<i>Anyphaena pugil</i> Karsch	イズツグモ
	HETEROPODIDAE	アシダカグモ科
49.	<i>Heteropoda forcipata</i> (Karsch)	コアシダカグモ

CTENIDAE

シボグモ科

50. *Anahita fauna* Karsch

シボグモ

II 福島県磐梯高原五色沼

採集日：1975年9月4日

THERIDIIDAE

ヒメグモ科

- | | |
|--|----------|
| 1. <i>Anelosimus crassipes</i> (Boes. et Str.) | アシフトヒメグモ |
| 2. <i>Ariamnes cylindrogaster</i> Simon | オナガグモ |
| 3. <i>Dipoena castrata</i> Boes. et Str. | ボカシミジグモ |
| 4. <i>D. punctisparsa</i> Yaginuma | シモフリミジグモ |
| 5. <i>Episinus affinis</i> Boes. et Str. | ヒシガタグモ |
| 6. <i>Rhomphaea sagana</i> (Doen. et Str.) | ヤリグモ |
| 7. <i>Theridion chikunii</i> Yaginuma | バラギヒメグモ |
| 8. <i>T. tepidariorum</i> (C. Koch) | オオヒメグモ |

LINYPHIIDAE

サラグモ科

- | | |
|---|----------|
| 9. <i>Linyphia oidedicata</i> (Heldsingen) | ヘリジロサラグモ |
| 10. <i>L. clathrata</i> Sundevall | コウシサラグモ |
| 11. <i>Neolinyphia fusca</i> Oi | クスミサラグモ |
| 12. <i>Prolinyphia longipedella</i> (Boes. et Str.) | アシナガサラグモ |
| 13. <i>Tapinopa longidens</i> (Wider) | カナコキグモ |

MICRYPHANTIDAE

コサラグモ科

- | | |
|----------------------------------|------|
| 14. <i>Tmeticus japonicus</i> Oi | ヌカグモ |
|----------------------------------|------|

ARGIOPIDAE

コガネグモ科

- | | |
|---|----------|
| 15. <i>Araneus fuscocoloratus</i> Boes. et Str. | ヤミイロオニグモ |
| 16. <i>A. ventricosus</i> (L. Koch) | オニグモ |
| 17. <i>A. cornutus</i> Clerck | ナカムラオニグモ |
| 18. <i>A. abscissus</i> (Karsch) | キザハシオニグモ |
| 19. <i>A. triguttatus</i> Fabricius | マメオニグモ |
| 20. <i>A. cucurbitinus</i> Clerck | ハナオニグモ |
| 21. <i>Neoscona scylla</i> (Karsch) | ヤマシロオニグモ |
| 22. <i>Argiope bruennichii</i> (Scopoli) | ナガコガネグモ |
| 23. <i>Cyclosa octotuberculata</i> Karsch | ゴミグモ |
| 24. <i>C. sedeculata</i> Karsch | ヨツデゴミグモ |
| 25. <i>Nephila clavata</i> L. Koch | ジョロウグモ |

TETRAGNATHIDAE

アシナガグモ科

- | | |
|--|----------|
| 26. <i>Leucauge magnifica</i> Yaginuma | オオシロカネグモ |
|--|----------|

KISHIDAIA 40 1976, May

27. *Tetragnatha praedonia* L. Koch アシナガグモ
 28. *Menosira ornata* Chikuni キンヨウグモ
 THOMISIDAE カニグモ科
 29. *Misumenops tricuspidatus* (Fabricius) ハナグモ
 30. *Philodromus aureolus* (Clerck) コガネエビグモ
 31. *Tibellus oblongus* (Walckenaer) スジシャコグモ
 32. *Tmarus piger* (Walckenaer) トラフカニグモ
 33. *Xysticus saganus* Boes. et Str. オオヤミイロカニグモ

III 新潟県新潟駅

採集日：1975年9月5日

- ATYPIDAE ジグモ科
 1. *Atypus karschi* Doenitz ジグモ
 AMAUROBIIDAE ガケジグモ科
 2. *Titanoeca nipponica* Yaginuma ヤマトガケジグモ
 THERIDIIDAE ヒメグモ科
 3. *Theridion tepidariorum* (C. Koch) オオヒメグモ
 ARGIOPIDAE コガネグモ科
 4. *Araneus ventricosus* (L. Koch) オニグモ
 5. *A. cornutus* Clerck ナカムラオニグモ
 6. *Nephila clavata* L. Koch ジョロウグモ
 UROCTEIDAE ヒラタグモ科
 7. *Uroctea compactilis* L. Koch ヒラタグモ
 AGELENIDAE タナグモ科
 8. *Agelena opulenta* L. Koch コクサグモ
 SALTICIDAE ハエトリグモ科
 9. *Carrhotus xanthogramma* (Latreille) ネコハエトリ
 10. *Menemerus confusus* Boes. et Str. シラヒゲハエトリ

ハエトリグモの分類 (II)

——— 日本産ハエトリグモ7種について ———

松 本 誠 治

(杏林大学医学部生物学教室)

日本産として記録されているハエトリグモは、85種を数えることができる。これらの中には旧北区に広く分布するものが最近になって日本で新たに記録されたものや、日本を模式産地として記載され、その後一度も採集されたことのないものも含まれている。前者の場合は、採集記録が後者と同様数少ないのではあるが、今後の調査で実態が明らかになることは確かである。しかし、後者の場合は、模式標本が外国にあったり、破損紛失したりしてその正体を明らかにするのが困難なものが多い。ましてや幼生を用いて記載されたものでは、その正体が不明のままいつまでも「日本産」として扱われていくことが予想され、残念なことと思う。このようなことは、ハエトリグモ科に限らず、日本産クモ類では、他のグループでも同じであるといえる。

日本産ハエトリグモで以前から採集目録によく名前を出て来る種は、アオオビハエトリ・アリグモ・ウススジハエトリ・カラスハエトリ・シラヒゲハエトリ・チャスジハエトリ・デーニッツハエトリ・ネコハエトリ・マガネアサヒハエトリ・マミジロハエトリ・ミスジハエトリで、それに次いで、アシプトハエトリ・アダンソンハエトリ・イソハエトリ・イナヅマハエトリ・ウデプトハエトリ・エキスハエトリ・オオハエトリ・オスクロハエトリ・チャイロアサヒハエトリ・メガネアサヒハエトリ・メスジロハエトリ・ヤサアリグモ・ヤハズハエトリ・ヨダンハエトリがよく目録に記録されている。これらの他に、ムツバハエトリ・ヤマジハエトリのように最近になってその生息が明らかにされ目録に記録されるようになったものや、チビクロハエトリ・ネオンハエトリのように分布が限られているため、まれにしか目録に載らないものもある。

筆者がいままでに収集した550個体余りのハエトリグモは、およそ40種程になるがその大部分はやはり、上に掲げたいわゆる普通種である。これら普通種については、広域分布と個体数の多さという点から、生態学的にも重要な種であるゆえに、分類学的検討は勿論、同定も確実に行なえるように、また欲をいえば、その生長段階をも早急に調査することがよいであろう。

今回はこのような考えに沿って、いくらかでも同定の役に立てられればと思い、とりあえず、7種について各部分の図を掲げることにした。

以下、7種の説明を若干しておく。

A. シラホシコゲチャハエトリ：旧北区に広く分布する種で、体長約3mm、雄は頭胸部金属光沢のある茶色、腹部は黒色で白色の点斑が目立つ。雌については不明、高知県ではブロック壁で数個体、神奈川県では芝の上で1個体採集している。また大阪では河原からの報告¹⁾がある。*Sitticus patellidens* Börs. et Str. 1906 は本種のシノニム²⁾。

B. ウデプトハエトリ：東洋区系のクモ、第1脚が他の歩脚よりも強大で、膝・脛節(第1脚)の上下面に毛束がある。この毛は単毛から羽状毛までの変異がある。雌雄共に3~4mmで、腹部後背面

KISHIDAIA 40 1976, May

に1対の白点斑があるが、これにも大きさの変異がある。なお、後牙堤が単歯で腹部の白斑がない近似種があるので注意を要する。3)

C. マガネアサヒハエトリ：いわゆる普通種の1つ。雌雄共に5~6mm。雄は雌よりも黒色の程度が強くなる。また、雌と同様⁴⁾、斑紋の変異が多い。マガネアサヒハエトリとは、頭胸部の高さ、雄触肢腿節、雄上顎の牙などの点で相違が大きい(別属とも考えられる)。

D. マミジロハエトリ：広域分布を示す。林道の下草に多く雌は雄よりも高い所にまで登る。色彩は雌雄二型を示す。雄は約5mm、雌では7mm余りにもなる。雄では和名の通り、頭胸部前縁の白毛がまた雌では背甲のU字状淡褐色毛および腹部後端の1対の黒色斑が特徴となる。

E. カタオカハエトリ：旧北区に広く分布する。雌雄共3~4mm。橙色毛を生じる美しいクモ。千葉県では九十九里海岸の松林の下草より採集されている。また松本(1970)⁵⁾中の26)の不明ハエトリグモは本種である。和名は、片岡佐太郎氏にちなんで命名された。

F. マガネアサヒハエトリ：マガネアサヒハエトリに混って採集される。両種は一見似ているので、特に幼生のうちは同定に注意を要する。Proszynski(1973)⁶⁾の検討により、*Jotus* から *Icius* に転属されている。雌雄共に5mm内外。雄は雌よりも暗色になるが、腹部のV字形につながる点对斑は共通している⁴⁾。

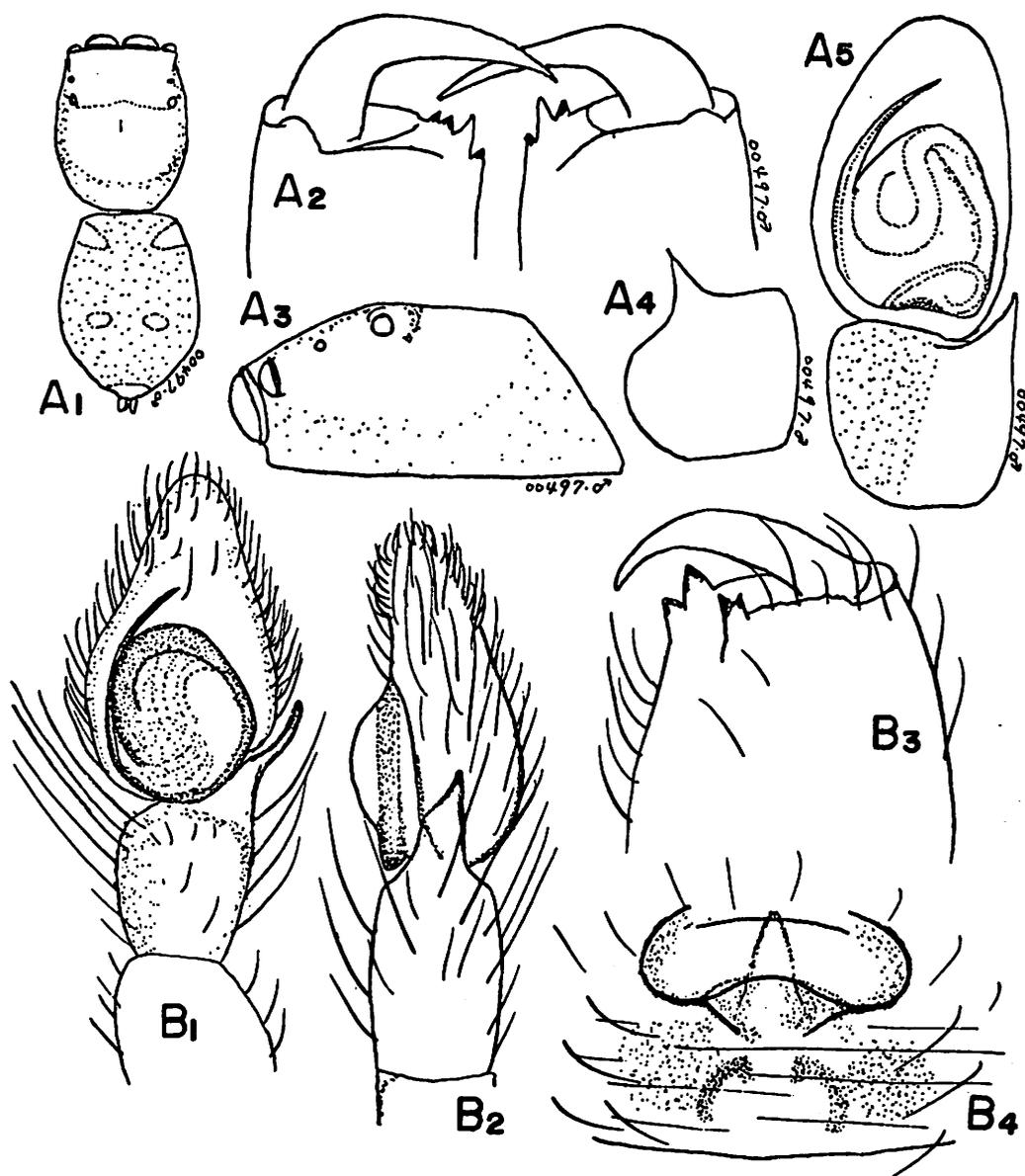
G. イソハエトリ：海岸の岩の上を徘徊している。外雌器・ゲニタリア共にシラヒゲハエトリとはその傾向を異にする(色彩の類似は生息場所による類似であるかもしれず、両者は別属とも考えられる)。雌は10mm近くに大型のハエトリグモである。

H. カラスハエトリ：*Rhene atrata* として親しまれてきた種であるが Proszynski(1973)⁶⁾により、本種は *Dendryphantes fusconotatus* や *D. thorelli* とよく似ており、また *Dendryphantes* の模式種 *D. hastatus* や *D. rudius* とも似た部分があるとして転属された。しかし、*Dendryphantes* 自体が、Roewer(1954)⁷⁾では、250種を含む大世帯の属であり今後検討されるべき部分が多いと考える。*Rhene* も *Dendryphantes* も共に単歯ハエトリとなっているが、カラスハエトリの後牙堤歯は単歯とも裂歯とも見える。このことも今後の牙堤歯の分類標徴としての重要性を考える材料になる。また上顎の形態、雄触肢に *Conductor* があることも興味深い。雌の大きさや外雌器の形態にかなりの差があるが、今のところ別種と考えるだけの材料がない。

I. エキスハエトリ：樹幹に多い小型ハエトリで色彩も暗褐色で杉皮と似る。体長雌雄共に3~4mm。外雌器は受精のうが透き通って見え、開口部と一緒にX字状を呈する⁸⁾。雄の触肢には *Conductor* がある。

J. ミスジハエトリ：関東地方では、関西のアダンソンハエトリのようなニッチを持っている。雌雄の色彩が大分異なる。また雄ではその色彩が鮮やかなもの地味なもの雌に比べて変化に富む。Proszynski(1973)⁶⁾により検討を受けている。

以上、7種の説明を簡単に行なったが、これらの種の学名については、検討を受けたもののうちの最も新しいものを使用した。しかし、マガネアサヒハエトリ・カラスハエトリのように今後も充分な研究を必要とするものもあるので、今回使用した学名は、現在使用されている最新のものというだ

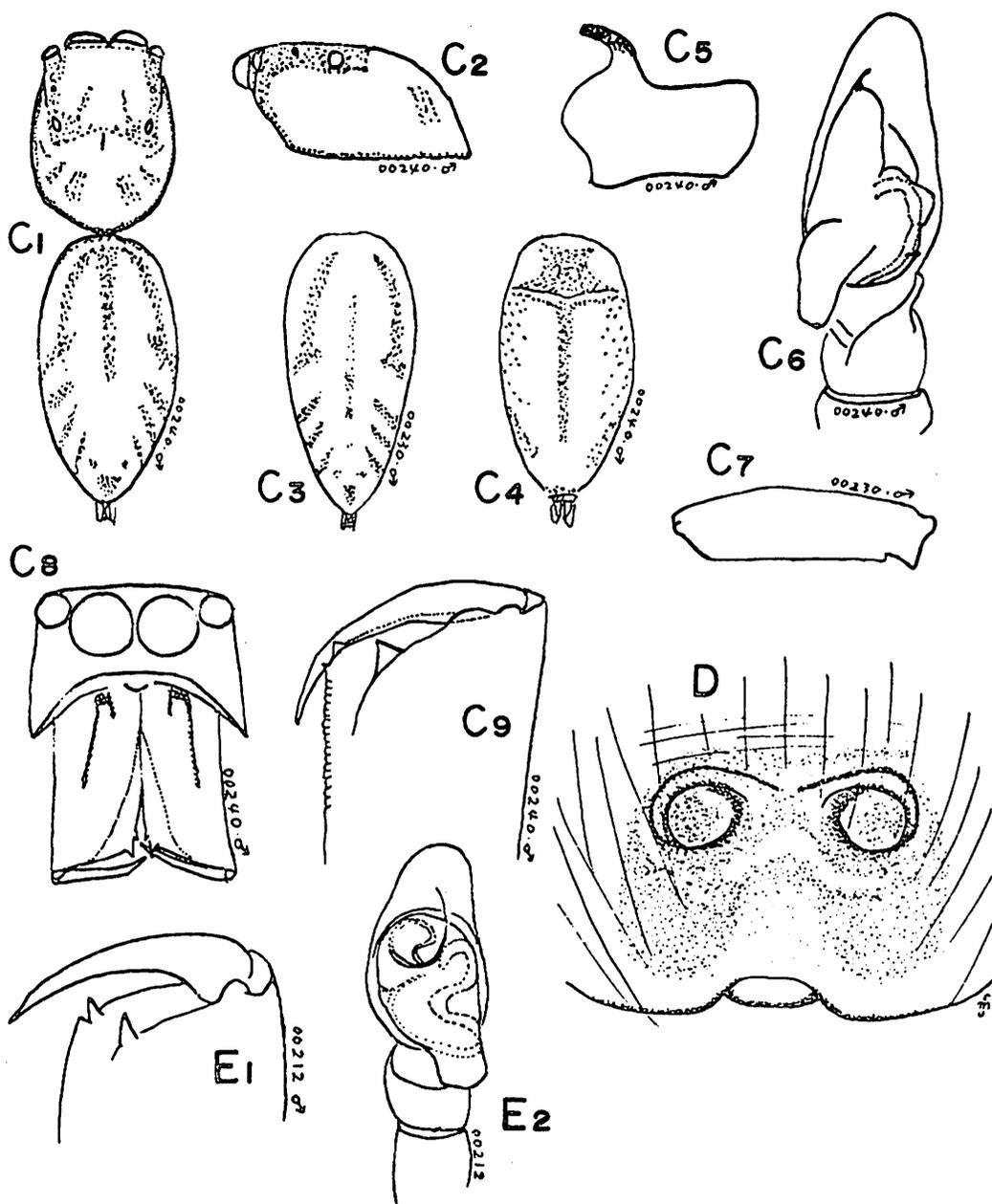


A: シラホシゴグチャハエトリ *Sitticus penicillatus* (Simon, 1875)

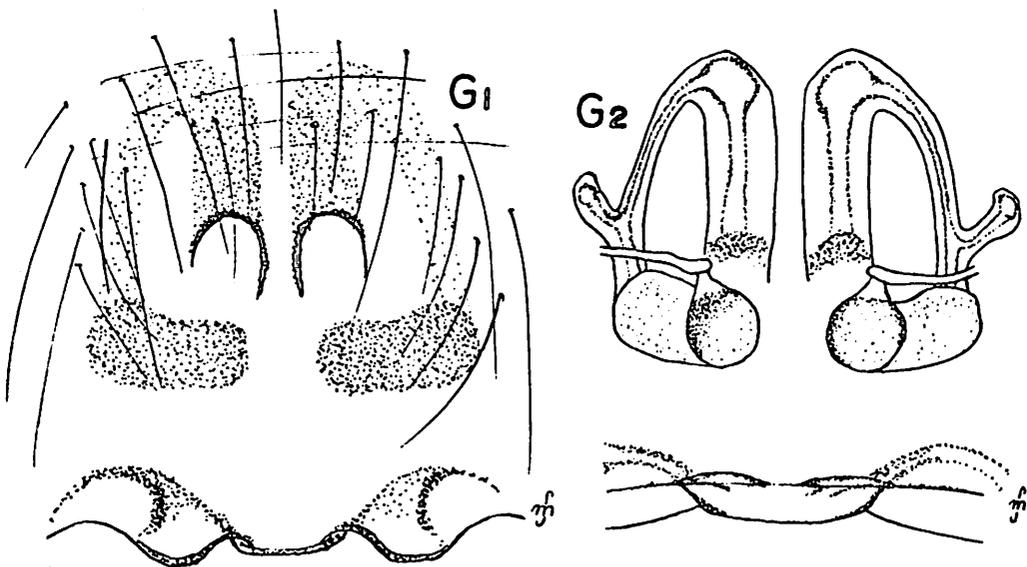
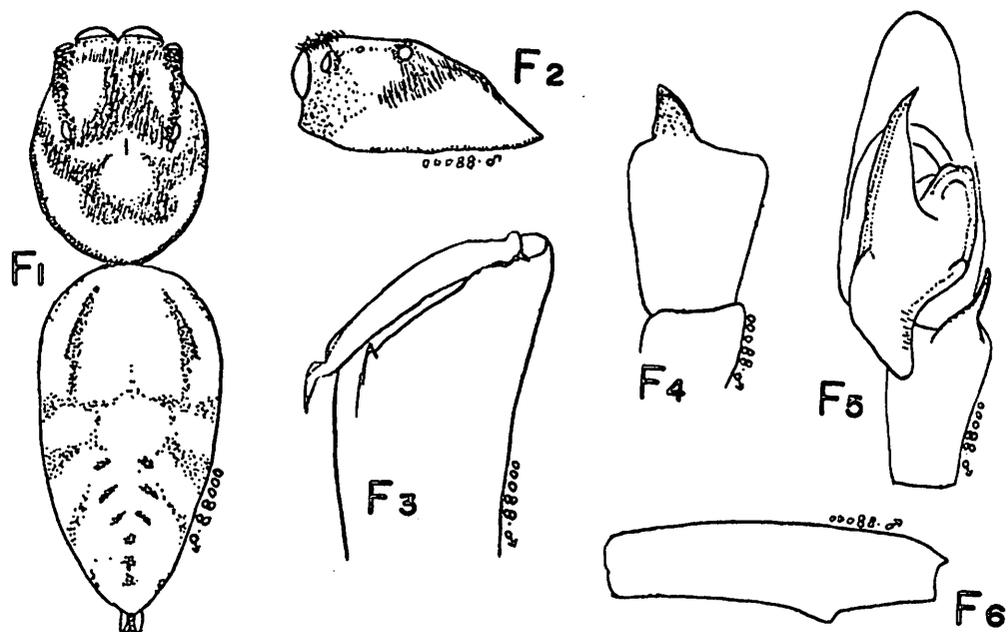
1. 雄背面 2. 雄上顎内面 (後面) 3. 雄頭胸部左側面 4. 雄左触肢脛節外側面 5. 雄触肢下面 (腹面)

B: ウデブトハエトリ *Harmochirus brachiatus* (Thorell, 1877)

1. 雄左触肢下面 2. 雄左触肢外側面 3. 雄左上顎内面 4. 外雌器



C: マガネアサヒハエトリ *Jotus difficilis* Bösenberg et Strand, 1906
 1. 雄背面 2. 雄頭胸部左側面 3. 雄腹部背面 4. 雄腹部腹面 5. 雄左触肢脛節外側面
 6. 雄左触肢下面 7. 雄左触肢腿節外側面 8. 雄頭胸部前面 9. 雄左上顎内面
 D: マミシロハエトリ *Evarcha albaria* (L. Koch, 1878) 外雌器
 E: カタオカハエトリ *Euophrys frontalis* (Walckenaer, 1802)
 [= *E. maculatus* (Wider, 1834)]
 1. 雄左上顎内面 2. 雄左触肢下面

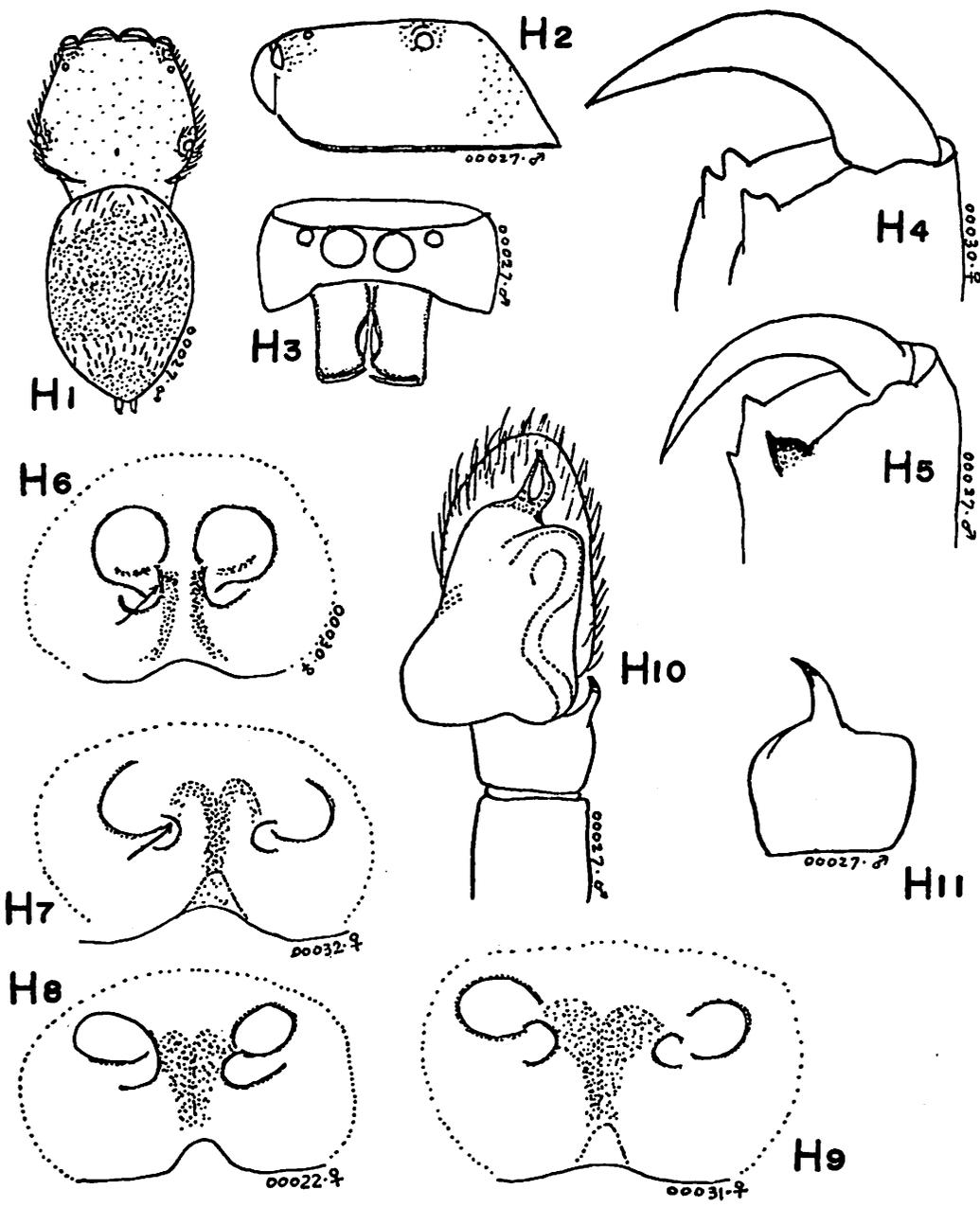


F: メガネアサヒハエトリ *Icius linea* (Karsch, 1879)

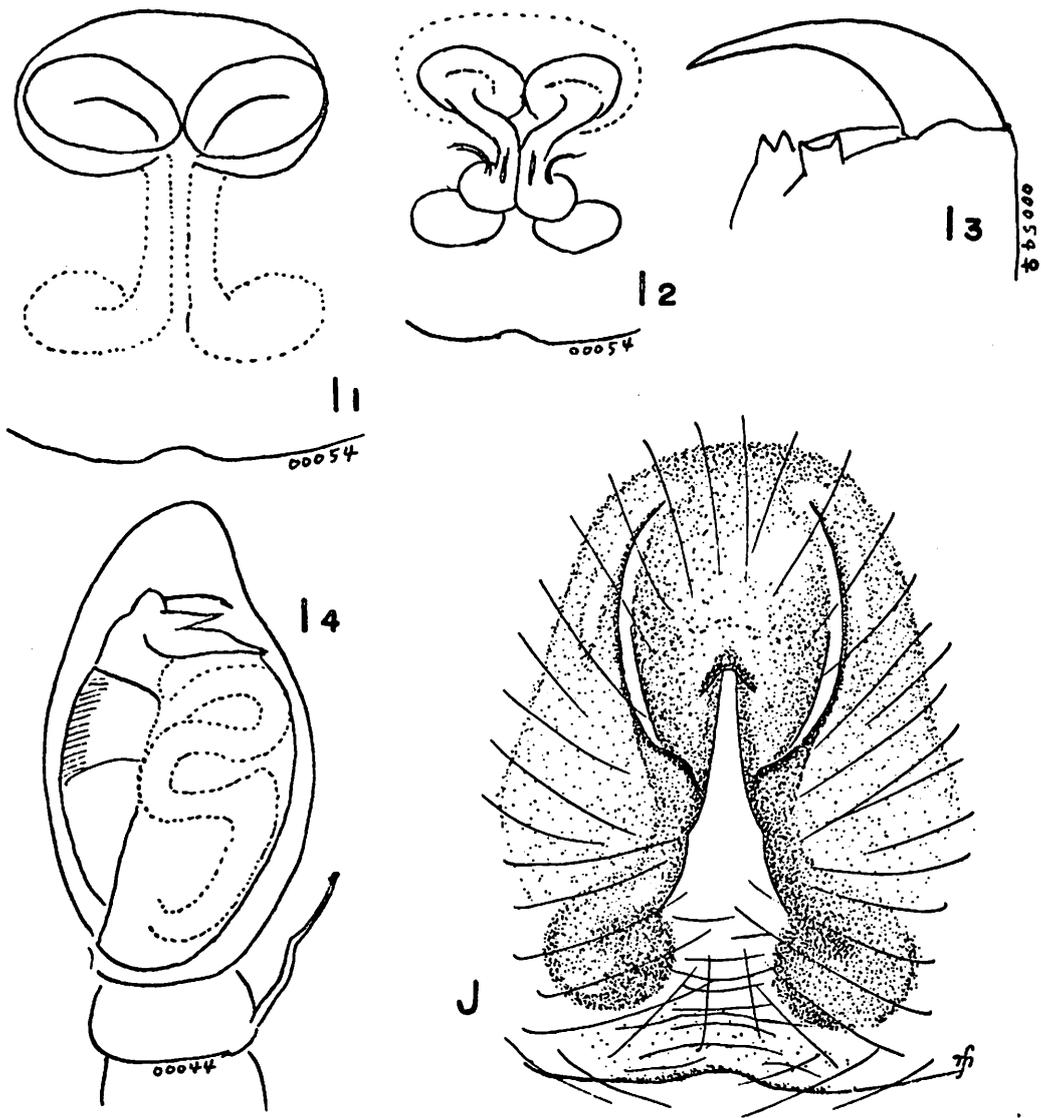
1. 雄背面 2. 雄頭胸部左側面 3. 雄左上顎内面 4. 雄左触肢脛節外側面 5. 雄左触肢下面
6. 雄左触肢腿節外側面

G: イソハエトリ *Menemerus himeshimensis* Dönitz et Strand, 1906

1. 外雌器 2. ゲニタリア内面



H: カラスハエトリ *Dendryphantès atratus* (Karsch, 1881)
 1. 雄背面 2. 雄頭胸部左側面 3. 雄頭胸部前面 4. 雌左上顎内面 5. 雄左上顎内面
 6. -9. 外雌器 10. 雄左触肢下面 11. 雄左触肢脛節外側面



I: エキスヘトリ *Laufeia aenea* Simon, 1888

1. 外雌器 2. ゲニタリア内面 3. 雌左上顎内面 4. 雄左触肢下面

J: ミスジヘトリ *Plexippus setipes* Karsch, 1879 外雌器

けて、今後も再検討の余地が残っているものであることをことわっておく。

文末ではあるが、標本の収集に協力を得た東京蜘蛛談話会の諸氏、特に、小野展嗣・熊田憲一・権田重雄・新海栄一・高橋米夫・田中穂積・山川守の諸氏並びに、具亮憲治・馬場金太郎・ミナノ高校生物部員の方々に感謝の意を表する。また、追手門学院大学教授八木沼健夫博士には、原稿の校閲をしていただいた。心から謝意を表する。

引用文献

- 1) 八木沼健夫 (1974) 淀川の河川敷における生態調査報告書、4. クモ類。同書：101-113
- 2) Proszynski, J. (1973) Revision of the spider genus *Sitticus* Simon, 1901 (Aranei, Salticidae), III. *Sitticus penicillatus* (Simon, 1875) and related forms. Ann. Zool. (Polska Akad.), 30(4):71-95
- 3) 松本誠治 (1975) ウデブトハエトリとその近似種について、Atypus, (63):16
- 4) 松本誠治 (1973) 神津島産真正蜘蛛類目録。採集と飼育, 35(2):41-47
- 5) 松本誠治 (1970) 磐梯高原のクモ。都生研会誌, (6):19-22
- 6) Proszynski, J. (1973) Systematic studies on East Palaearctic *Salticidae*, II. Redescriptions of Japanese *Salticidae* of the Zoological Museum in Berlin. Ann. Zool. (Polska Akad.), 30(5):97-128
- 7) Roewer, C. Fr. (1954) Katalog der Araneae, von 1758 bis 1940, bzw. 1954., 2 Band, Abt. b.:927-1751, Inst. royal Sci. nat. Belgique (Bruxelles)
- 8) 八木沼健夫 (1968) 日本のクモ和名考。Atypus, (46/47):43-46

DRAGLINE

蜘蛛の脱皮について

佐久間 良 三

蜘蛛は体の成長に伴い何度か脱皮を行なうが、脱皮は蜘蛛の体がある程度まで大きくなると行なわれるのが普通である。ところが、反対に体が小さくなった時にも脱皮が行なわれる事がある様だ。つまり、長期の餌不足により体が瘦て小さくなった時などに見られる事がある。私はこの事について2回観察した事がある。2回とも飼育中に見られた事である。1回目は5年程前の事であるが、ビンの中で飼っていたイエオニグモの雌が餌を与えるのを止めて3ヶ月程で脱皮した

事を覚えている。残念な事にこの蜘蛛は脱皮中に死んでしまった。2回目は最近まで飼っていたカレハヒメグモの雌で、これについては少々記録しておいたので、不十分な記録であるが次に記しておく。

1975年12月3日、近くの神社で採集したカレハヒメグモの雄と雌をポリスチレン製容器（直径2.5cm、長さ7.5cm）中で飼育し始める。蜘蛛の体長：雄約6mm、雌約7mm。1976年1月18日、蜘蛛に初めて餌（エダシクガの一種、体長約5mm）を与える。雌がこれを捕食した。蜘蛛の体長：雄5mm、雌6mm。3月18日、雌が昨日脱皮したらしく近くに脱皮殻があり、雌の体色も普通の時より薄かった。雄は大分前に死亡（2月上旬頃餓死したと思われる。）してしまっ。蜘蛛の体長：雌5mm。4月7日、雌の蜘蛛は数日前よりかなり衰弱していたが、今日死亡してしまっ。蜘蛛の体長：雌5mm。（なお、飼育中餌を与えたのは1月18日のみである。）

飼育と言っても残酷な飼育であったが、以上の事から、蜘蛛は体が大きくなる時だけでなく体が小さくなった時にも脱皮をする事が言える。しかし、この事がすべての蜘蛛について言えるかどうか、また野外で実際にこの様な事が行なわれているかどうかについては、少々疑問が持たれる。

アリの好むクモ

松本誠治

小野展嗣氏が本誌39の41ページに「ア리를きらくクモと好むクモ」を書かれている。それに次ぐアリとクモの資料として、ヤマジハエトリが体長5mm程の黒色でつやのあるア리를捕食しているのを、10月10日滝山城趾で観察した。どのようにしてとらえたか不明である。普段の行動はアオオビハエトリとはちがうけれども、ア리를捕えるときはどうだろうか、興味がある。

カクレ帯をつけたヤマオニグモの幼生

松本誠治

本誌39の40ページの上記表題と内容、目次、そしてKISHIDAIA総目次の該当部分のヤマオニグモをヤエンオニグモに訂正していただきたく願います。去る10月10日滝山城趾で行なった採集観察会で新海栄一氏に確認・訂正され、読者に申し訳けないことと思っている。このような報告で同定にミスがあったことは大変重大な問題と反省する。採集会当日にもヤエンオニグモは、同様なカクレ帯を付けていた。ヤマオニグモでのカクレ帯のことについては今後その有無の確認に努力したい。

その8 オスクロハエトリとヤハズハエトリの雌雄関係判明

第7回大会の講演中の、千国安之輔・八木沼健夫氏の共同発表で、表記の雌雄関係とさらにその近似種の紹介があった。表記2種の雌は互いによく似ているが、腹部背面の黒褐色の2縦条の中に、後半により濃色の対斑の現われるのがオスクロハエトリ、現われないのがヤハズハエトリであることがわかった。雄では、ヤハズ斑のあるのはヤハズハエトリ、全体黒褐色なのがオスクロハエトリとのこと。近似種もいることなので標本を再検討してみる必要があるようだ。

その9 キヌキリグモの習性の発見と分類上の位置の変更

ATYPUS, 65, P.10 に、キヌキリグモの網のことが書いてある。「下草(葉の広いもの)の間に目の荒いシート網(10~20cm)を張り、下面に静止する」とある。この習性を理由に、報文の著者の1人新海氏は、キヌキリグモの所属をアシナガモ科からサラグモ科に移し、また属名は広義に扱って *Leptyphantus* とした。学名は、*L. cericeus* (Saito, 1934) となる。習性の発見・確認と共に、科の所属変更のあったクモとして明記したい。〔新海栄一・原勝司(1975) 秩父地方の真正クモ類. ATYPUS, (65): 7-18〕

その10 シボグモモドキ 長野県八千穂高原で採れる

東京蜘蛛談話会過激派「水曜会」の採集会が、1975年11月10日、長野県八ヶ岳で開かれ、自動車を使って採集してまわり多大の収穫をあげて帰京した。この車で次々に移動して採集して行く方法は、大阪の西川氏、東京の松本氏の得意とする採集で、水曜会もこれをまねて長野県を車で横切ったわけである。

八ヶ岳1500m地点で採集を終り、数10kmの速さで走る車の中でクモを見ていたKさんは、「これはきれいなツグモの幼生」、「かわいらしいアマギエビスグモの幼生」、「美しいイシワオニグモ」などと一匹ずつ解説つきで名前を言っていたが、最後に「このきたないクモはなあに?」と一言。そこで竜さん「このきたないクモ」を見たところ、なんと日本で4頭目のシボグモモドキ。採ってからまだ数分しかたっていなかったのに、早速ひき返すことになったが、車は熊さんの運転ですでに20km?は来ていたようであった。

KISHIDAIA 39号 正誤

頁	行	正	誤
目次	14	問題点	問題
9	16	1973	1978
9	17	1974	1979
42	7	熊田	態田
48	22	"	"

編集後記

岸田久吉先生の遺蔵書目録で始まったこのキングダイアも今年で発刊8年目、延べ3000頁を突破し、益々快調、今回は先頭に吉倉先生の玉稿を載せ、松浦、鈴木、佐久間氏等の若手（我々ばもはや若手ではなくなった）の進出もあり、また高野氏はじめベテランも相変わらず健在、間にはさまれた我々も大いに張切らねば、まけていられませぬ、その一端、松本氏のヘエトリクモの解説見ていただければ幸い、面目をたもつには充分過ぎ、これからの発展が楽しみ、面目といえば我会長登嶋先生も益々御活躍、先頃、日本テレビ系「怪人もは誰だ」に出演、クモの真の姿を説いたのは、媒体がテレビだけに効果絶大、さすが面目躍如たるもの、お蔭様で、この40号もなんとか、発行にこぎつけ、編集者ほっと胸をなでおろすも、一部原稿の遅れと編集のくずぐずのために、皆様首を長くしてお待たのところで、誠に申し訳なく、矢の催促に該当者ただただ油汗、ミスのないことを祈るばかり、さて、ぶっちゃけた話が、（編集者これでクビになるやも知れず、覚悟はできた）、本誌1号分の印刷代だけで談話会年間予算の1.5倍をゆりに越え、これだけみても、赤字経営、印刷屋さんにも相当無理をいうも世の中物価上昇に勝てるわけもなく、どうやら数年来の繰越貯金も底をつき、かと言って会誌発行しなわけにもいかず、原稿がせっかく増えてきているとき、あとただ皆様の前にひざまずき御寛容を乞う次第、6月13日の総会、会費値上げとか、運営委員そろってよろしくお願い申し、その席上に本身を届ける使命、いざ栄さん。

末筆ながら、校正に多大の御苦労をおかけした熊田惑一氏にお礼申し上げます。

KISHIDAIA 40 1976年5月30日印刷 編集者 小野 展 周

1976年5月31日発行 発行者 登 嶋 泉

発行所 東京 麹 鎌 談 話 会

〒 191 東京都日野市豊田1896 登 嶋 泉 方

PHONE 0425 (01) 7128

印刷所 東京都豊島区目白2丁目14-2 小 山 タ イ プ
